第2章 小豆島町の概要

第 | 節 自然環境

(1)位置(図2-1)

小豆島町は、香川県北東部にあって、瀬戸内海東部のほぼ中央に位置する小豆島の南東部を占めており、北側と東側は瀬戸内海を介して岡山県や兵庫県、淡路島と接し、南側は四国本土に面している。西側は、土庄町と接しており、両町で小豆郡を形成している。町の総面積は、95.59km²で、小豆島のおおよそ2/3を占める。小豆島への航路は多く、高松市、岡山市、姫路市や神戸市などとのフェリー航路を有し、本州及び四国からのアクセスが容易である。

(2) 地形と地質(図2-3)

小豆島の地形は、標高 600m~800m の台地から海へと下っており、山上から急斜面地が海浜部まで連続する場所が多い。そのため、島には平地は少なく、傾斜地が多い地形を生かした棚田や段畑、平坦地を補うための埋立地等の土地利用も見られる。海浜部は、全体的に湾が入り組んだ地形となっている。

地質は、基盤を構成する約8,000万年前(白亜紀後期)の花崗岩類の上に、1,300万年前~1,500万年前(新第三紀中新世)に噴出した瀬戸内海火山岩類が堆積した後、1,000万年以上にわたる浸



図 2-1 小豆島町の位置



図2-2 急斜面に築かれた棚田(中山地区)

食を受け、台地上の山地が形成されている。これらの地質は、寒霞渓や山岳霊場、白砂青松の海浜景観のみならず、大坂城石垣石丁場に代表される花崗岩の採石業、安山岩の風化した地質と地滑り地形を生かした棚田、花崗岩の風化した真砂土が流れ込んだ土地に形成された醤油づくりの町やオリーブ畑等の様々な恵みをもたらしている。

その一方で、風化した花崗岩は雨によって崩壊しやすい特性があり、土石流が発生しやすく、山崩れに伴う土石流災害、山地における表層崩壊、法面の崩壊による地滑り災害の危険性をはらんでいる。また、急峻な地形のため河川が短く浅く急流であり、基本的には豪雨の際には激流となって一気に流れ下ることとなり、鉄砲水や土石流等の災害に繋がりやすい。さらに常に少雨であるため、ため池が多く、土砂の流入により決壊する恐れもあり、小豆島は水に関する災害が発生しやすい地形を持つ。昭和49年(1974)と51年(1976)には、集中豪雨により大規模な土砂災害が発生し、合わせて60名にも迫る犠牲者と膨大な家屋被害を出した。

また、小豆島は瀬戸内海火山噴火の中心地で、大量の火山噴出物から形成されていることから、「世界

のマグマ研究者の聖地」と呼ばれている。特に神浦権現山(神浦地区・皇子神社)は、沈み込んだマントルが溶けてできたマグマが直接地表に噴出したものであるとされ、世界的にも貴重な地質を確認することができるなど小豆島全体が貴重なジオサイトとして注目されている。

内陸部は、瀬戸内海島嶼部の最高峰である標高 816.1m の星ヶ城山をはじめとした急峻な山岳地帯(嶮岨山系)を有し、その他も 150m から 400m ほどの山々からなる。山上から急斜面地が海浜部まで連続する場所で、渓谷が形成されている箇所も多い。中でも奇岩奇石の渓谷と瀬戸内海を一望できる景勝地の神懸山(寒霞渓)(国名勝・神懸通地区)は、日本三大渓谷美の一つに数えられ、瀬戸内海国立公園の特別地域に指定されている。海浜部は、花崗岩の風化によって砂州が発達し、白砂青松の瀬戸内海の海岸美を呈している。

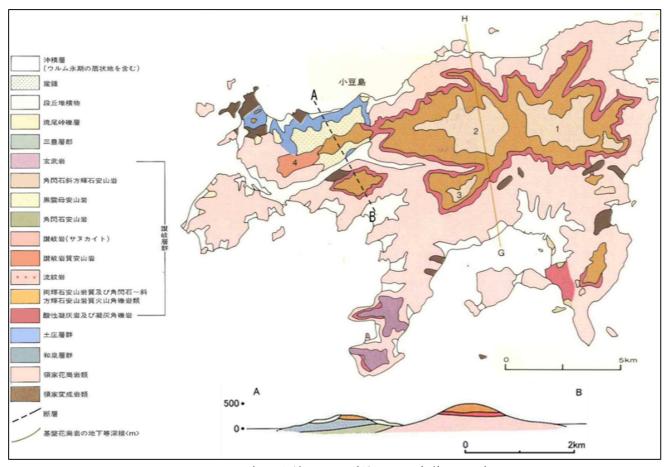


図 2-3 小豆島の地質平面図(長谷川・斎藤 1989)」

主要な河川は、中山間地域である中山地区や、一大穀倉地帯である土庄町肥土山地区を潤す水源である 殿川や、寒霞渓から内海湾に注ぐ別当川等がある。また、小豆島では干ばつが頻発したため、水源地を確 保するためのため池が、江戸時代以降各地区に築造された。主には、江戸時代初期に掘削されたとされる 池田大池や、築造の際の音頭が伝承される猪谷池等があり、現在においても農業用水の水源として活用 されている。

Ⅰ 長谷川修一、斉藤実「讃岐平野の生い立ち―第一瀬戸内類層群以降を中心に―」(『アーバンククボタ』No.28、平成元年3月)

島を取り囲む瀬戸内海は、約 20,000 年前の最終氷期最盛期には陸地であったが、海水準の上昇により紀伊・豊後の両水道から水が入って海域が広がり、7,000 年から 8,000 年前に関門海峡が形成されたことにより成立した。瀬戸内海は、島が集中し潮流が速い「瀬戸」と、島が少なく潮流の緩やかな「灘」に分類される。小豆島は、備讃瀬戸と播磨灘に接し、瀬戸と灘の境界にあるため、瀬戸の多島美と灘の広く穏やかな海域の両方の要素を持っている。

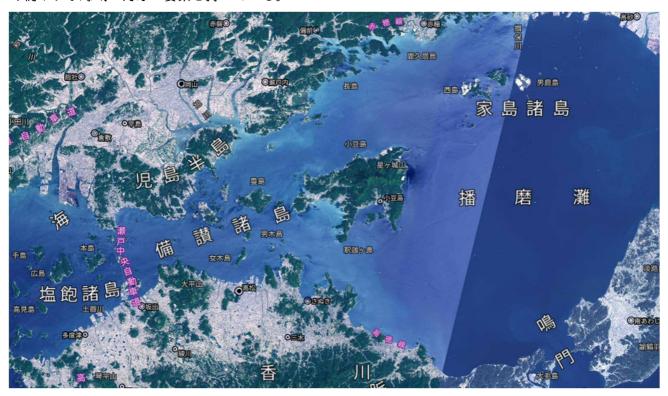


図 2-4 小豆島周辺の海域(国土地理院地図)

(3) 気候・気象(図2-5)

本町の平均気温はおおよそ 16℃前後で、平均降水量は年間 1,100mm 前後である。温暖小雨な瀬戸内 式気候に属する。夏季は、小雨に加えて気温が高いため水不足になりがちであり、冬季は、シベリアから の北西の季節風が、乾燥した冷たい空気となるため、降水量は極めて少ない。

この乾燥した空気は、素麺等の製造に向いた気候となる一方で、降雨量の少なさから、干ばつによる水不足を幾度ももたらしたが、4基のダムの建設によりほぼ解消された。現在ではこの気候を生かして、オリーブ、みかん、いちご、すももなどの果樹や電照菊などの花き栽培が盛んである。特に小豆島のオリーブは、日本におけるオリーブの発祥の地として全国的に有名である。

温暖小雨な瀬戸内式気候とオリーブ畑の風景は、青い海と明るい空と合わさって地中海のイメージで 語られることが多く、このイメージを好んだ若い画家らによって多数の風景画が描かれた。

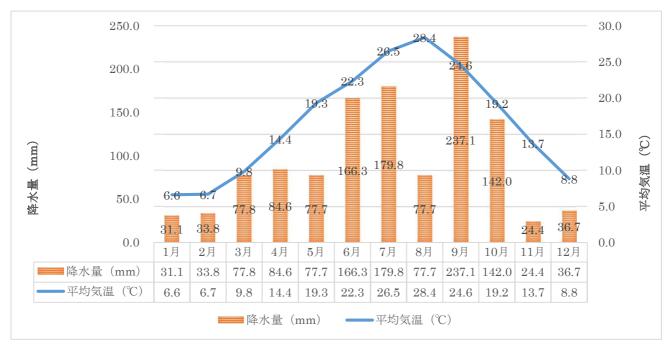


図 2-5 小豆島町内海の平均気温及び降水量(平成 28 年~令和 2 年の平均) ※気象庁 HP

(4)動植物(図2-7)

小豆島は海浜部から標高 800 メートルの急峻 な山岳地帯があり、それぞれの環境に応じた多種 多様な動植物が存在している。中には、小豆島独 自の固有種も確認されている。

海浜部や低山地域では、三都半島や島東部のアベマキ - コナラ群落やトベラ - ウバメガシ群落がみられ、内海地域や島北部ではコナラ群落がみられる。特にウバメガシの群落は、瀬戸内海地域の



図 2-6 ショウドシマレンギョウ

代表的な植生であり、ウバメガシ-ヒトツバ群落という耐乾性植物による瀬戸内海海岸地域の典型的な姿を伝える皇子神社社叢(国天記・神浦地区)、内海八幡神社社叢(県天記・馬木地区)、西山稲荷神社社叢(町天記・坂手地区)等がある。

このほか、日本最大級のソテツである誓願寺のソテツ(国天記・二面地区)等の巨樹や、丘陵地に成立するシイ・クス型の照葉樹林の典型的な林相を示す福田八幡神社社叢(県天記・福田地区)、市街地にありながらウバメガシやムクノキ等の多くの巨樹で構成される高木明神神社社叢(町天記・西村)等の社叢・群落もある。

山岳地帯では、嶮岨山地域にはアカマツ群落、神懸山(寒霞渓)附近の乾燥しやすい讃岐層群には、シデ(イヌシデ-アカシデ群落、イワシデ群落等)が多くを占めており、小豆島の高地の独特の景観を形成しているほか、ミセバヤ、カンカケイニラ、ショウドシマレンギョウといった小豆島の固有種が生息しており、これらの多くが国立公園や保安林として保護されているほか、社叢や名木等については指定文化財や保存木として保護が図られている。

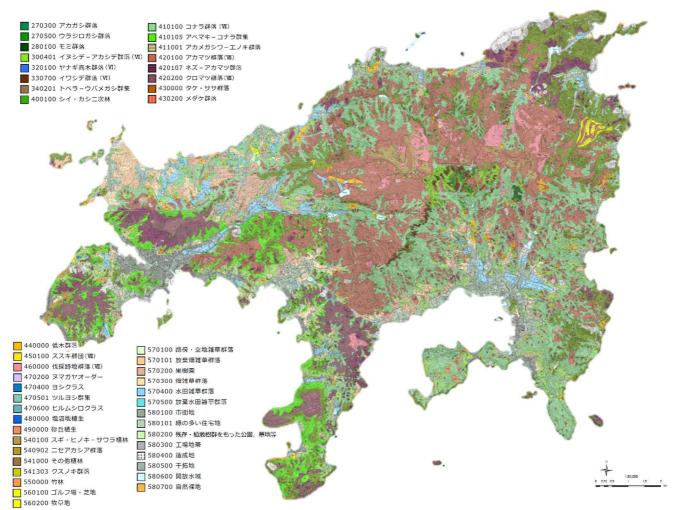


図 2-7 小豆島の植生図(環境省生物多様性センターweb-GIS「25,000 分の I 図」を加工して作成)

動物では、ヤハタマイマイ(カンカケマイマイ)等の固有種のほか、ニホンイシガメ(爬虫類・香川県RL 準絶滅危惧)、クビジロツメヨトウ(昆虫・香川県RL 絶滅危惧 II 類)等の希少な種のほか、外来種のヌートリアやタヌキ、大型のニホンジカやイノシシ、ニホンザル等が見られる。

イノシシやニホンジカは、古来農作物に被害を出す害獣であるが、江戸時代中期に猪鹿垣が築かれ人間と動物の共存が図られた。明治時代には感染症の流行によって島内のイノシシが全滅したとされるが、平成 20 年代頃に四国等の周辺地域から泳いで島に侵入している様子が確認されて以降、島内で繁殖し、島内各所の農作物等に被害を出している。ニホンザルは、昭和 30 年代に寒霞渓や銚子渓(土庄町)で餌付され、両渓谷で群れを形成することに成功した。これらはサルの生態習性、社会構造の研究のために学術的な価値が高いサンプルとされたことから、両渓谷の群れが天然記念物として保護されている(老杉洞のニホンザル群、銚子渓のニホンザル群(ともに県天記))。

周囲を取り巻く瀬戸内海では多様な動物相が見られ、小豆島ではタイやタコ、アナゴ、ナマコなどの多種多様な魚介類が水揚げされる。瀬戸内海には島の多い「瀬戸」と島の無い「灘」があり、区域によって動物相が異なるとされ、潮流が速く海底が砂地である「瀬戸」はタイ等の筋肉質な魚や砂地を好むタコ等が生息し、一方で潮流が緩やかで海底が泥質の「灘」はアナゴやハモ等の生息に適しているとされる。小豆島は、西側の備讃瀬戸と東側の播磨灘に囲まれていることから、豊富な水産資源にあふれている。

第2節 社会環境

(1) 小豆島の沿革(図 2-8)

律令制下において、小豆島は備前国児島郡に属し、奈良時代には官牛の牧として活用された記録(『続 日本紀』)があるが、実態は未詳である。

中世には、島内に肥土荘等の複数の荘園が見られ、敦実親王領(宇多天皇皇子)、石清水八幡宮領(肥 土荘のみ)、八条院領となり、鎌倉期には鳥羽院の影響下にある順徳天皇領、北条家の影響下にある後高 倉院領、安嘉門院領、大覚寺統領等の院宮家関係の荘園を経るが、承久の乱以降領家職は九条家が知行し た。

南北朝期には、備前国児島の佐々木信胤が小豆島一円を統治したことで、島内の荘園は崩壊したとされ る。信胤以降は、細川管領領として被官の寒川氏、安富氏らによって支配され、三好氏の台頭による寒川 氏らの主家の移り変わりにより、小豆島の所属も移り変わっていったとされる。天正3年(1575)には、 讃岐へと勢力を伸ばした織田信長の勢力下に置かれたとされ、天正9年(1581)頃には羽柴秀吉家臣の 小西隆佐・行長親子が、天正 16 年(1588)頃には片桐且元が代官として支配にあたった。秀吉没後も 且元が代官として支配を続け豊臣領として残されたが、慶長 19年(1614)の且元の大坂追放後は、徳 川方の且元から塩の納入を命じられる一方、豊臣方の大野治長からも塩・薪の納入が命じられ、双方に貢 納するなど、徳川家と豊臣家の板挟みの状況に置かれた。

江戸時代の小豆島は、幕府領(天領)であり、時代に応じて大坂船奉行や倉敷代官、高松藩預かりや松 山藩預かりなど上位官庁が変遷したが、離島であるため実務は年番庄屋(代表庄屋)と大庄屋が取り仕切

枝村の年寄によって支 配された。天保期 (1830-44) には、島 の西部 6 郷が津山藩に 繰り入れられ、支配のあ り方の違いに不満を持 つ村民により一揆も発 生した。

り、各村では大庄屋と各

村は 9 つの本村とそ れに属する枝村とで構 成されており、村の支配 にあたっては本村の大 庄屋を頂点として、枝村 には世襲の年寄と、組頭 5~6名で運営されてい た。(図 2-8)

明治4年(1871)に は新政府の諸改革によ り庄屋や年寄が廃され、

	江戸時代…幕領(明治4年(1871)まで)			1)まで)		近代	戦後			
江戸時代(九村体制 親村・・・「郷」で記載 枝村・・・「村」で記載		高松藩預地 (島内全域) ①宝永5年(1708) ~正徳3年(1713) ②享保6年(1721 ~元文4年(1739)	松山藩預地 (東部三郷) 天保元年(1830) ~天保8年(1837)		津山藩領 (西部六郷) 天保9年(1838) ~明治4年(1871)	明治維新	市町村制施行 (明治の大合併) 明治21年(1887) ※香川県下では 明治23年(1890)に実施	町村合併 促進法 (昭和大合併) 昭和28年(1953)	合併新法 (平成大合併) 平成17年(2005)	
土庄郷(笠井氏) 【土庄】土庄村、鹿島村、大木戸村 【豊島】家浦村、唐櫃村、甲生村							土庄村 明治31年(1898)町制移行 豊島村			
上庄郷(紀氏) 上庄村·北山村						np.	渕崎村 上庄・(北山)・(赤穂屋)	土点	EBT	
渕崎郷(笠井氏) 渕崎村、赤穂屋村、伊喜末村、 黒岩村、小馬越村						明治時代	大鐸村 肥土山·笠ヶ滝·黒岩·小馬越	(昭和30	0年~)	
肥土山郷(大田氏) 肥土山村、笠ヶ滝村						の諸改革	四海村 伊喜末·小江·長浜·滝宮	※大部村は昭	和32年に統合	
小海郷(三宅氏) 小海村、見目村、屋形崎村、馬越村、 滝宮村、長浜村、小江村						下記	北浦村 _{小海·見目·屋形崎·馬越}			
大部郷(山口氏) 大部村、田井村、小部村					幕府領を継続	i:	大部村			
池田郷 (平井氏、後に岡田氏) [池田]浜村、北地村、迎地村、上地村、 中山村、蒲生村 [二生]室生材、二面村 [三都]吉野村、蒲野村、神浦村						より、個別の	池田村 昭和4年(1929)町制移行 二生村 三都村	池田町 (昭和29年)		
草加部郷(菅氏) [草壁]上村、下村、片城村 [西村]西村、下村、片城村 (安田)木庄村、安田村、橋村、岩谷村、 当本庄村、安田村、橋村、岩谷村、 国初南羽村、古江村、堀越村、田浦村 [坂手]坂手村					幕府領を継続	村に独立	草壁村 大正6年(1917)町制移行 西村 苗羽村 安田村 坂手村	内海町 (昭和26年) ※福田村は 昭和32年に統合	小豆島町 (平成18年)	
福田郷 (湊氏、後に三木氏) 福田村、吉田村					幕府領を継続		福田村	四和32年1○机合		

【村名の表記について】

カッコ内は各本村の庄屋の家名である。 2段目以下の村名は枝村である。枝村は時代ごとに変化するが、本表では『小豆郡誌』の天保9年(1838)の村名で表 記した。 接村のまとまりをわかりやすぐするため、明治23年の合併時の名称を[]で示した。 なお、上庄村、渕崎村、肥土山村、小海村は明治の合併で大幅に振り分けが変わったので、この表記を行っていな

・・ ・大部村、福田村については江戸時代の区分けが引き継がれたので、そのまま表記している。

【明治時代の変革】 廃藩置県による庄屋・年寄の廃止 明治13年(1880) 枝村独立によって枝村と本村の関係が解消し、44の独立した村が誕生

図 2-8 江戸時代以降の小豆郡内の村の変遷

明治 | | 年 (1878) には「小豆郡」が置かれ、| 郡 44 村の体制となったが、明治 23 年 (1890) には明治の大合併によって | 6 村となった。戦後、昭和 28 年 (1953) の昭和の大合併では 3 町となり、平成 | 18 年 (2006) の平成の大合併では現在の | 郡 2 町となった。

行政区画は変遷しているが、江戸時代の枝村の単位は、町を構成する自治会等の基礎的な単位として残っている。加えて、この枝村単位を基礎として現在の村落の祭礼や郷社の八幡神社への太鼓台等の奉納が行われており、現在でも住民の帰属意識として根強く残っている。

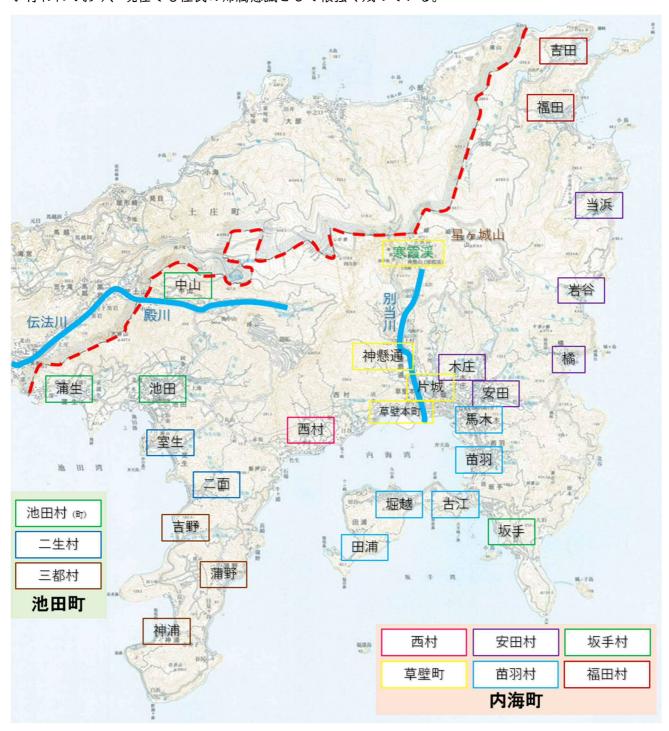


図 2-9 町内地域の状況(枠外白抜が明治時代の旧村)

(2)人口動向

小豆島では、江戸時代初期から中期にかけて播州赤穂等の塩浜稼ぎの労務者が流入したこともあり、人口が増加したものと推測される。幕末(天保年間)には約34,000人であったものが、大正期にかけて増大し50,000人に達して、それ以降は45,000人程度で太平洋戦争まで推移してきた。終戦後は戦線からの復員者や都会からの疎開者に加え、ベビーブームにより昭和22年(1947)には60,000人を突破した。しかしながら、これ以降は次第に減少し、昭和60年代には明治期と同等となり、現在は江戸時代(17世紀末頃)と同等の人口となっている。(図2-10)

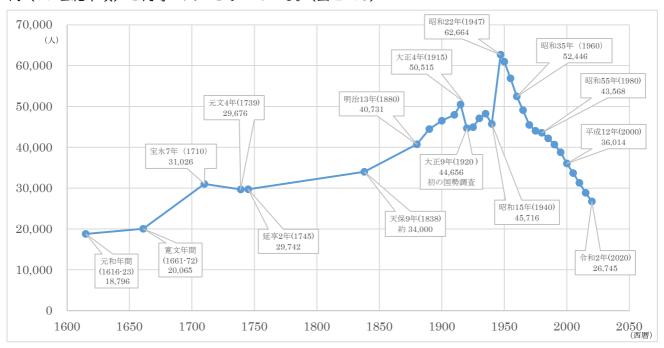


図 2-10 小豆郡の人口推移(江戸時代~令和2年)※『池田町史』及び国勢調査を基に作成

小豆島町の人口(図 2-11)は、戦後の国勢調査である昭和 22 年(1947)の 33,328 人を最高値として、年々下降を続けており、平成 7 年(1995)には 20,000 人を切り、現在は 13,000 人台となっている。今後の推移では、令和 42 年(2060)には 8,858 人という想定がなされており、「地域の宝物」を支える地域コミュニティの弱体化が懸念される。

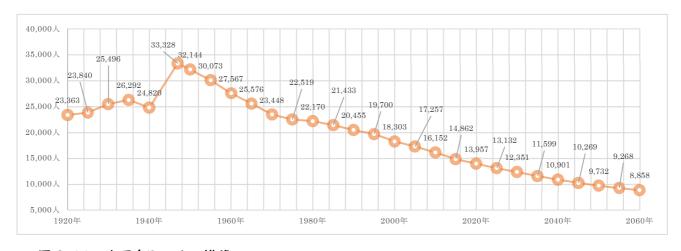


図 2-11 小豆島町の人口推移(平成 27 年以前は国勢調査の成果による。令和 2 年以降は人口ビジョンによる推計)

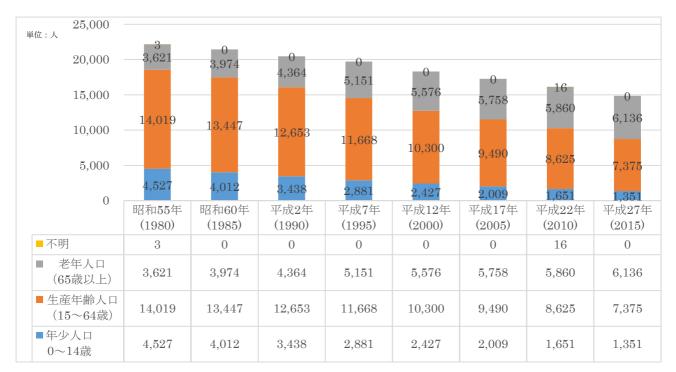


図 2-12 小豆島町の年齢三区分人口の推移(国勢調査の成果による)

年齢三区分の人口推移(図 2-12)では、昭和 55 年(1980)と平成 27 年(2015)とで、生産年齢人口(15 歳~64 歳)及び年少(0-14 歳)が 10%を超える減少幅を持つのに対し、老年人口(65 歳以上)の人口割合は 25%以上増加しており、少子高齢化の減少の傾向が顕著に表れている。なお、本町は県内でも最も高齢化率が高く、また人口に占める子どもの割合が少ないといったように、顕著に少子高齢化の進行が見られる。

(3) 産業

本町には、醤油や素麺、花き、海産物、石材、オリーブ等の多様な産業が伝承されている。これらの多くの原型は江戸時代に求めることができる。

ア 各時代の産業

①江戸時代の産業

江戸時代の島民の生活は、主に半農半漁であったとされ、漁業や廻船業に従事しながら、農業を営んでいたとされる。漁業では、鰯網や鰆網、手繰網等が行われたほか、ナマコ(海鼠)は全国的にも知られ、 江戸城への献上品や中国への俵物としても重宝された。

廻船業では、優れた操船や造船技術を生かして九州や奥州、山陰等、日本中に小豆島の船が走ったとされ、年貢米などの輸送も行っていた。徳川大坂城の普請にあたっての石垣石をはじめとする石材や、塩、醤油、素麺等の食料品も、船を使って大坂等に運ばれており、京阪神地域と海路でつながることで、島の生業は発展した。

農業では、米や甘藷等の作物や採油のための菜種が作られ、水源を確保するためのため池等も各地に作られた。池田地区を中心として、農閑期を生かして素麺の製造を行う零細農家もおり、江戸時代後期にか

けて一大産業として発展した。

②近代以降の産業

明治期以降になると、醤油や素麺の需要はます ます拡大し、大正時代にかけて大隆盛した。

農業では、郡役所による農業の奨励により、米 麦、たばこ(米国黄色煙草)、キンセンカや電照菊 等の花きのほか、梨やりんご、ぶどう、みかん、 すもも、オリーブ等の果樹栽培が行なわれるよう になった。中でもオリーブは、明治 41 年(1908) に自国でのオリーブ栽培の必要性に迫られた農 商務省が植栽実験に成功したことから、小豆島 は、「日本オリーブ発祥の地」と呼ばれ、現在もオ リーブは島の基幹産業の一つである。

産業構造では、昭和55年(1980)に1次産 業が 11.13%、2 次産業が 39.6%、3 次産業が 49.27%となっており、2次産業や3次産業の比 率が高い。旧町では、内海町では2次産業(製造 や加工業)が多く、池田町では | 次産業(農林水 産業)が多く、それぞれの特徴を有する。

平成 27 年では | 次産業が 5.5% (△5.63)、 2 次産業が 33.07% (△6.53)、3 次産業が 61.44% (+12.17) となっており、1次・2次 産業の下がり幅が大きく、伝統的な食品製造等に 従事する者の割合が減じていることが伺える。

イ 島における特徴的な産業

①製塩業

塩は、小豆島の名産品であった。正徳5年 (1715) の『和漢三才図会』には、小豆島が塩の名 所として登場する。江戸時代には、京都・大坂では 赤穂塩に次ぐ上質な塩と珍重され、塩相場が米相 場・綿相場の基準となったとされ、ブランド塩「島 塩」として名声を得るようになる。

小豆島での製塩は、弥生時代頃から行われたとさ れる(浜条遺跡等の製塩土器)。奈良期には、調とし て塩を朝廷へ納めた記録が残る (平城京跡木簡)。



20% 10% 0% 昭和55年 昭和60年 平成2年 平成7年 平成12年 平成17年 平成22年 平成27年 (1985)(1990)(1995)(2000)(2005)■第1次産業 ■第2次産業 ■第3次産業 旧内海町の産業別就業人口割合 旧池田町の産業別就業人口割合 第1次産業 第2次産業 第3次産業 昭和55年 6.699 41.899 51.41% (1980) 昭和60年 6 9 4 9 41 60% 51.46% (1985) 平成2年

42.09%

42.12%

41.129

37.42%

5.449

4.93%

3.729

4.02%

(1990) 平成7年

(1995) 平成12年

(2005)

	第1次産業	第2次産業	第3次産業
昭和55年 (1980)	20.70%	34.64%	44.66%
昭和60年 (1985)	20.09%	35.15%	44.76%
平成2年 (1990)	16.64%	34.92%	48.44%
平成7年 (1995)	14.92%	36.41%	48.67%
平成12年 (2000)	13.88%	35.37%	50.75%
平成17年 (2005)	11.32%	33.10%	55.58%

(2010)

図 2-13 小豆島町の産業別就業人口 (国勢調査の成果による。平成 18 年以前は、旧町合計数)

52.479

52.96%

55.16%

58.56%



図 2-14 蒲生遺跡の鹹水槽遺構 (香川県埋蔵文化財センター提供)

平安時代以降、島内の荘園化が進む中で、肥土荘 (土庄町)では「八幡宮御白塩地」とするために石清 水八幡宮に寄進され、神事に用いる塩が求められる 等、塩が貢納品として珍重された。

15世紀の瀬戸内海海上輸送の状況を伝える『兵庫 北関入舩納帳』には、兵庫北関(播磨国)に多くの小 豆島の船が出入りし、I万石以上の大量の塩が通関し ている様子を伝えるほか、町内の中世の製塩遺跡や製 塩土器の出土状況や、「赤松家文書」(町有形)にみら れる明応年間(1492-1501)の草加部郷(旧内海 町)の塩田等の状況から当時の盛況さがうかがえる。

天正年間(1573-92)頃になると、塩浜師が赤穂から馬木村や赤穂屋村(土庄町)に多数移住し、池田村等の塩田の整備を進めるとともに、入浜式塩田の技術を伝え、良質な塩が生産できるようになった。現在も赤穂より移住したとされる塩田姓や三枝姓が多く集住している。彼らの先祖は浄土真宗門徒であったため、正保2年(1645)には馬木地区に真光寺を建立し、住職を招いた。

塩は、近世を通じて大坂や京都方面に運ばれ、京 坂市場へ売り込まれた。慶長年間(1596-1615)に は大坂の有力な塩商の法華庄次郎らによって島塩問 屋が組織され、元禄年間(1688-1704)には、生産 地ごとに島(小豆島)、灘(兵庫県)、赤穂(兵庫 県)の三種の問屋に分かれ、三塩問屋と呼ばれた。 三塩のうち、島塩は赤穂塩についで良質とされ、そ の声価は灘塩を圧倒していたという。

17世紀末から18世紀末にかけて最盛期を迎えるが、江戸時代中期頃になると、瀬戸内海沿岸地域に十州塩田が発達して各地で製塩が行われるようになり、後期に入ると塩の過剰生産のため、国々の塩田が申し合わせて秋冬の二季休浜となり、製塩業が有



図 2-15 塩田絵額(真光寺)



図 2-16 真光寺



図 2-17 平井家岡田家文書「塩浜稼方書上帳」 に描かれる鹹水槽(汐壺)

利な事業ではなくなった。天保7年(1836)には飢饉により米価が暴騰し、塩田が維持できず畑地等 に転用される等、製塩業は次第に衰退した。明治から昭和初期までは、草壁地区、安田地区で塩田が経 営されたが、その後廃絶した。

②醤油醸造業

江戸時代中期、島の特産であった塩が生産過多になった際に登場したのが、醤油醸造業である。近代には 丸金醤油が日本の四大醤油メーカーの一角を担い、一 時代を築き上げた。

小豆島の醤油は、元禄期(1688-1703)頃に上方地域にて醤油が消費され始めたころに、原料である塩を回漕した船頭らによって学び取られたとされる。その後は富農によって自家醸造されていたようであるが、文化年間(1804-18)には産業化した醤油が文献上初めて登場する。高橋文右衛門による醸造である。この頃には大坂にも商圏を広げており、既に一大産業として成長していたとされる。

その後、近代にかけて急速に発達し、明治 10 年 (1877) には 400 戸の醸造家があり、仕込数も 35,000 石に及び、近代を通じて更に生産高は増加し ていった。明治 | | 年(1878) には島内業者の粗製乱 売と競争激化を統制することを目的とした「栄久社」、 明治 33 年(1900)には「小豆島醤油製造同業組合」 が組織された。明治38年(1905)には、関東醤油と の競争と品質向上のため、木下忠次郎が中心となっ て、組合立醸造試験場(現在の香川県発酵食品研究所) が設立され、製造技術、機械、技術者養成等の取組が なされたほか、明治 40 年(1907) には小規模な醸造 業者を集約して合資化した丸金醤油株式会社や清水 醤油株式会社等の大規模な企業が設立され、経営合理 化が推し進められ、小豆島醤油の近代化が発展した。 特に丸金醤油は、小豆島を代表する醸造蔵として発展 し、昭和 9 年 (1934) 頃から日本の四大メーカーの 一つに数えられるようになった。戦時中の混乱期を経 て、戦後の昭和27年(1952)には小豆島醤油協同組 合が設立され、現在もなお技術継承や品質保持等を行 っている。

醤油産業の発展の背景には、原料の塩は小豆島で、 小麦は備前・讃岐等の沿岸地域、大豆は船の往来のあ



図 2-18 木桶を用いた伝統的な醤油醸造 提供:(株) ヤマヒサ



図 2-19 マルキン醤油記念館



図 2-20 木桶の製造技術の継承 提供:ヤマロク醤油(株)

った九州から大量に入手でき、さらに出来上がった製品は船でどこまでも大量に運ぶことができるという環境や地理的な条件と合致したことが大きく、風土を生かして小豆島の醤油産業は繁栄した。現在は 18 軒の業者が醤油を生産し、多くは現在国内でも希少となった巨大な木桶による醸造を行っている。ま た、戦後に醤油産業から派生した佃煮は、戦後の GHQ の施策によってアミノ酸醤油が奨励されたため、 天然醸造の醤油が危機に立たされたことをきっかけとして、昭和 20 年(1945)にサツマイモのつるを 醤油で炊き上げて、関西地方へ出荷したことに始まり、現在は多種多様な佃煮が製造されている。

現在の醤油醸造業者は、創業が近世や明治初期まで遡るものや、複数の小規模業者が結合して創業したもの、廃業した事業者の設備を引き継いで営業しているものもあり、醤油醸造最盛期の風情や技術を伝えている。また伝統的に使用され、現在は姿を消しつつある「木桶」が島内多数伝承しており、多くは現在もなお醸造に使用されている。このような経緯から、町内には醤油醸造蔵等の近代施設や、近世以降に財を成した醤油醸造家の邸宅等の建造物や庭園などの名勝地が多数伝承され、醤油・佃煮産業に関連した醤油蔵等の生産施設や醤油で財を成した邸宅が立ち並び、連続した建造物群や寺社、庭園や練塀(ネルベ)等の工作物等とともに、周囲の景観に溶け込みながら、往時の風情を伝えており、「醤の郷(ひしおのさと)」と呼ばれている。

また、日本の産業近代化の過程を物語る存在として「近代化産業遺産群」(経済産業省)の「瀬戸内海沿岸の気候風土に育まれた製塩業・製造業の近代化の歩みを物語る近代化産業遺産群」の構成遺産に含まれるものもある。

近年では、日本古来の木桶の醸造技術・製造技術の継承と普及啓発に努める事業者へ注目が集まっており、令和3年(2021)に小豆島を中心とした県内の伝統的な醤油醸造の技術が「讃岐の醤油醸造技術」として国の無形民俗文化財に登録されるなど、昔ながらの醤油醸造に注目が集まっている。

③素麺業

小豆島の素麺は、播州、三輪と並ぶ日本三大素麺の一つに数えられる。嘉永年間(1848-54)に編纂したとされる『小豆島名所図絵』では、名産として素麺を挙げて「色白く細くして味美なり。他国の産と異にして最よし」と評される。伝承では慶長3年(1598)に池田村の柴田某がお伊勢参りの途上で、三輪(大和国)より伝えたとされ、時期について定説はないが、少なくとも17世紀末頃には生産されていたと考えられる。

当初は、数件の零細農家が行った農閑期の副業であったが、江戸時代後期頃(寛政年間~天保年間頃(1793-1843))には産業として成立した。この頃には、富農による素麺問屋ができ、零細農家に原料の小麦や油を提供する仕組みができあがって産業を助長していくこととなった。この時期には廻船業の発展に伴って、大坂、九州(唐津、長崎など)域等へも素麺が出荷されるようになった。

素麺問屋は、原料の小麦を殿川水系(中山・肥土山) の水車を活用してひき、小麦粉と油を農家に提供し、



図 2-21 小豆島の素麺



図 2-22 仏壇のオイナワ素麺

出来上がった素麺を取引する問屋制家内工業で生産を拡大させていった。また素麺問屋は文久 2 年 (1862) に「三輪大明神講」と称する組合を結成し、価格やその他取決めを行なったほか、小麦 | 石に対して、つけ油として「正胡麻油」を 4 合使用する等のルールも定められた。この胡麻油の生産で財を成したのが「かどや」(かどや製油株式会社)である。

近代に入ると、なお盛況さが増し、明治 12 年頃(1879)になると精算額(産額)は 100 万貫に達し、郡内産物の第 1 位となって醤油の精算額を上回ったが、この頃には播州龍野や備中の素麺が盛行して競争が激化し、明治 35 年頃(1902)の精算額は 30 万貫と激減した。

明治 24 年(1891)に他地域の素麺業との対抗と品質の維持向上のために、池田地域のみの業者による「小豆島池田素麺商営業組合」が組織され、明治 40 年(1907)には全島の製造者、仲買業者、製粉業者、製箱業者を対象とした「小豆島素麺同業組合」が設立され、素麺の等級等が定められた。大正期には機械化が導入されるなど技術革新に努めた。戦後、昭和 26 年(1951)には、「小豆島手延素麺製粉協同組合」が組織されると、製品の共同販売、原料の共同購入により、生産量も成長した。平成 3 年(1991)には現在の「小豆島手延素麺協同組合」が組織された。

素麺は生活にも密着しており、かつては盆にお供えをするため、長い素麺を編んで、仏壇にかけるという風習があり、現在も数件の家で行われている。また、素麺の有名な産地である島原地方(長崎県)では、寛永 14 年(1637)の島原の乱後に、小豆島から移住した島民が素麺づくりと伝承したといわれており、他の地域にも影響を及ぼしている。

4)採石業

小豆島では、良質な花崗岩や、加工しやすい凝灰角礫岩(豊島石)が産出する。これらは、石造物や城郭の石垣、敷石等で利用されている。

豊島石は、土庄町豊島及び小豆島で産出されるもので、加工のしやすさから墓石、灯籠、建材、クドなどの石造物の材料として珍重され、中世以降、県内及び瀬戸内海地域に広く分布したが、現在採石は行われていない。

花崗岩は、徳川家による大坂城普請(元和6年~寛 永6年(1620-29))に伴い、島内各地で大名が採掘 をしたことに始まり、島を代表する産物となった。急 傾斜地の多い小豆島にあって、海岸への運び出しやす さと、比較的大坂に近い立地や巨大な石を大坂まで運 ぶための水夫の高い技術があったため、採石業が起こ り、発展した。

花崗岩の石材産業は、島の北部や東部で主に行われ、切り出された石は、陸軍参謀本部や大坂築港、皇居、桃山御陵、京都市電の敷石等の近代日本の発展には欠かせない構造物を支えたほか、三角点の支柱や、



図 2-23 豊島石製六角灯篭 (伝キリシタン灯篭)



図 2-24 割られた花崗岩 (大坂城石垣石丁場跡)

日露戦争の旅順港閉塞作戦(明治 37 年(1904))でも使用された。戦後復興期に入ると関西圏での石材需要が高まり生産量が向上したが、現在は縮小傾向にある。

本町では古来の採石業や石割の技術に注目し、「石のシンポジウム」を開催するなど、石の持つ文化と魅力の磨き上げに努めている。令和元年度(2019)には、 備讃瀬戸の石の文化が、土庄町と岡山県笠岡市、香川県丸亀市の4者連名で日本遺産に認定された。



図 2-25 島石を活用したとされる皇居正門石橋

⑤海運業

①~④の産業を支えたものが海運業である。中世以来、小豆島は加子役(加子浦)₂の役割を果たしていたため、早くから海運業が発達し、17世紀中期には水夫が 6,203 人(当時の人口の約3割)、船数は七百石積みの大型船から二十石の小型船まで含めて281艘を数えた。

古くは塩の輸送が主であったが、近世には奥州や九州といった各藩の年貢米を江戸や大坂へ運ぶようにもなった。また買積船として、島で作られた塩や素麺、醤油などを積み、北九州で売り、小麦や米、干鰯、小豆などを買って兵庫や大坂で転売したほか、時には北陸沿岸地域や薩摩の産物を兵庫や大坂で売るなど、瀬戸内海を越えた広い範囲で活躍した。また、島外船との交流も頻繁にあり、内海八幡神社や橘荒神神社には、関西地域の船籍地の船頭や商人の寄進による石階段や狛犬等が残される。彼らの活躍によって、産業の活性化とともに、文物・人・情報の往来が活発化し文化の移入が促進されることとなった。

⑥オリーブ

小豆島は「日本オリーブ発祥の地」と呼ばれる。これは、明治 41 年 (1908) に農商務省が三重県、鹿児島県、香川県(小豆島)で試験栽培を行い、小豆島でのみ結実に成功し、その後栽培と加工が発展したことに由来する。

この背景として、明治 37 年-38 年 (1904-05) の 日露戦争がある。戦後のポーツマス条約 (明治 38 年 (1905)) によって、日本は北方海域に広大な漁場を 獲得した。これにより、膨大な量の魚介類の水揚げが 可能となったが、魚介類を保存・輸送するために油漬



図 2-26 オリーブ

けにする必要があり、これに用いるオリーブオイルの国内自給が求められ、国策による本格的なオリーブ栽培がはじめられた。明治 41 年(1908)の栽培実験後、大正初期には搾油が始まり、年々収穫量を増やし、以後日本オリーブを代表する島となった。

戦後以降も、小豆島や香川県内のオリーブは発展を続け、昭和 39 年(1964)には県内の収穫量が 400†

² 加子浦は、有事等の際に有力者の要請に応じて水夫と船を供出するもので、江戸時代には幕府により「加子浦」の指定受け、年貢減免等の特権を有した。中世においても、室町期の細川管領家領の時代や、織豊期の朝鮮出兵において有力者の求めに応じて水夫と船を供出した例が確認できる。

を超え、最盛期を迎えたが、昭和 34 年(1959)のオリーブ製品の輸入自由化により、外国産の安価な製品に押され、国内の生産は急速に減少に転じた。現在においては、民間事業者や行政の活動により、生産量は向上し、小豆島の基幹産業となっている。

(4) 観光

小豆島には、瀬戸内海国立公園の要素である備讃瀬戸の美しい海浜や名勝寒霞渓のほか、江戸時代後期以降に発達した遍路文化(小豆島ハ十八ヶ所霊場)、オリーブ・醤油・素麺等の食品産業、棚田、郷土の作家壺井栄の名著『二十四の瞳』等のさまざまな観光資源があり、戦後以降は「観光の島」として知られている。

島内の観光開発にあたっては、昭和 27 年(1952)に寒霞渓を中核とした島めぐり観光バスがはじまり、その後小豆島バス株式会社や小豆島総合開発などの民間企業によって孔雀園や寒霞渓ロープウェイ等の観光施設が整備された。昭和 49 年 (1974) には池田



図 2-27 オリーブ公園

城山一体が国民休養地として国民宿舎小豆島が整備され、平成8年(1996)には小豆島ふるさと村と小豆島オリーブ公園が道の駅となり、観光地整備が進められている。

観光客数の推移では、戦後の全国のインフラ整備や寒霞渓開発、映画『二十四の瞳』等により、徐々に増大していき、昭和48年(1973)には山陽新幹線の岡山延伸により154万人の観光客が訪れたが、それ以降は第1次オイルショックや大規模災害の影響もあり急落した。その後は昭和62年(1987)の二十四の瞳映画村(昭和61年(1986)ロケのセットを保存)のオープンなどにより急増し、平成に入って以降は漸落傾向を見せる。平成22年(2010)以降は瀬戸内国際芸術祭の影響もあり、観光客数も持ち直しつつあったが、令和2年(2020)の新型コロナウイルス感染症の流行によって大幅に減じている。

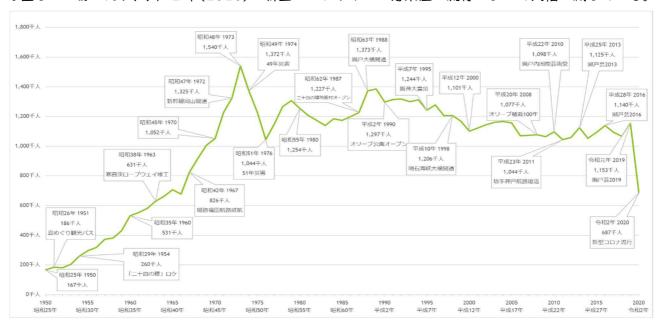


図 2-28 小豆島の観光客数の推移(一般社団法人小豆島観光協会「小豆島各港別乗降客等調査表」)

ア 寒霞渓等の景勝地の観光地化

名勝寒霞渓は、江戸時代後期頃から文人墨客によって景観美が認識され、近代以降に住民の活動によって全国に知られるようになった景勝地である。特に中桐絢海や森遷らは、大坂の新聞記者や文人墨客を招き、詩文やガイドブックなどを刊行し、積極的に普及啓発を促進した。また彼らは名勝の保護や開発にも努め、紅雲亭や石碑の整備や神懸山保勝会の設立などに尽力した。保勝会は、彼らの事績を引き継ぎ、積極的に名勝の開発、保護を推進した。

その他、寒霞渓を保存するために私財を擲って土地 を買う費用を寄付した「醤油王」長西英三郎や、寒霞 渓を含む備讃瀬戸の国立公園化運動に尽力した高橋和



図 2-29 保勝会の刊行した 『寒霞渓道しるべ』『錦渓集』『神懸山志』

三郎など、寒霞渓の保存と活用のために尽力した島民は数知れない。彼らの努力により、寒霞渓は全国に知られ、瀬戸内海を代表する景勝地となった。

イ 瀬戸内国際芸術祭と「地域の宝物」

瀬戸内国際芸術祭は、「海の復権」をテーマとして、 備讃瀬戸の島々と港を舞台として行われている現代 アートの祭典で、平成22年(2010)から3年に1 度開催されている。香川県が事業主体として行われ、 本町も重要な拠点の1つとして活用されており、多く の観光客の来島に結びついている。

芸術祭は、過疎化などで活力を失いつつある島々に、「美しい自然と人間が交錯し交響してきた瀬戸内の島々に活力を取り戻し、瀬戸内海が地球上のすべての地域の『希望の海』となること」を目標として掲げており、島の魅力を活かしたアート作品が展示され、地域の特性を生かした「地域の宝物」のユニークベニュー3が展開される。

本町においても、瀬戸内海や山岳、港町等のほか、棚田や醤の郷、神懸山(寒霞渓)(国名勝)等の特徴的な景観や歴史的建造物(国登録)を活かしたアート作品の展示や、中山の舞台(国重有民)を活かした現代劇の上演が行われ、これまでにない切り口での「地域の宝物」の活用が促進されている。



図 2-30 名勝神懸山 (寒霞渓) に設置された芸術作品 (青木野枝「空の玉」)



図 2-31 中山の舞台を活用した現代劇の上演

³ ユニークベニューとは、歴史的建造物・神社仏閣・城跡・美術館等の独特な雰囲気を持つ会場で、会議・レセプション・イベント等で活用することで、特別感や地域特性を演出することを目的とするものである。(文化庁 地域文化創生本部編『文化財を活用したユニークベニューハンドブック』平成 31 年 3 月)

ウ 「世界の持続可能な観光地 TOP100 選」の選出

「世界の持続可能な観光地 TOP100 選」は、持続可能な観光地を認証する国際団体「グリーン・デスティネーションズ」が、持続可能な観光4の国際基準に基づき、より良い地域づくりに努力している地域が毎年選出されるものである。

令和3年度(2021)に、小豆島町の景観保全や文化財の保護、エネルギー消費量の削減等の取組と、優れた取組事例である「中山千枚田の保全活動」と「郷土愛に守られた寒霞渓」が認められ、2021年度版「世界の持続可能な観光地 TOP100選」に選出された。

DISCOVER OUR SUSTAINABILITY STORY

図 2-32 世界の持続可能な観光地 TOP100 選

(5) 交通

ア 島外との交通

小豆島と外を結ぶ交通路は海路である。 現在本町においては池田港(高松航路)、坂 手港(神戸航路及び高松航路)、福田港(姫 路航路)があり、また土庄町においては土 庄港(高松航路、岡山航路、豊島宇野航路)、 大部港(日生航路)があり、1日65便の フェリーまたは高速船が行き来しており、 年間の乗降客数は300万人を超える(令 和元年(2019))。寒霞渓観光の玄関口と して栄えた草壁港(高松航路)については、 令和3年(2021)に休止している。

江戸時代には、廻船業の発達によって瀬

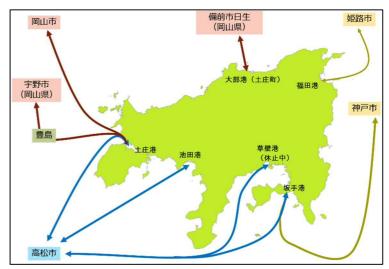


図 2-33 島内各港と島外への航路

戸内海を超えて全国に小豆島の船が走り、また大坂に近しい立地であることから、島外の船も行き来することで、人や物、情報が頻繁に行き交った。主要な港は、坂手浦小嶋湊(坂手港)、下村(草壁港)、土庄(現在の土淵海峡)であり、三津と呼ばれた。

近代以降は、九州-大阪間は帆船が、高松-岡山間は押切船や五挺船等の小型船が、各港に寄って荷客の運搬を担っていたが、明治 20 年代(1887-97)に汽船が登場し、下村、坂手、池田の各港に就航して、四国(高松、多度津)や岡山、大阪、姫路、九州等の都市圏と、島内の主要な港と各村(草壁、池田、二生、三都、苗羽、安田、坂手、橘、福田、古江等)とを結ぶ航路が敷かれた。戦後には福田-飾磨(姫路市)航路も整備され、現在ではフェリーに姿を変えて、集約される。(図 2-33)

⁴ 持続可能な観光は、「自然」「文化」「伝統」「そこに暮らす人々」などの地域資源を生かし、旅行者を受け入れ、地域経済を発展させながら、同時に自然 環境や文化、伝統を守るという「そこに暮らす人々」の未来にも十分に配慮した観光のあり方である。

イ 島内の交通

島内の主な交通手段は、車である。土庄 港と福田港を結んで、南側の国道 436 号 と北側の香川県道 26 号も主要道路とし、 島内各所を県道が結んでいる。

国道 436 号は、姫路市を起点として高松市に至る一般国道で、姫路―福田間と土庄―高松間のフェリー航路が国道に含まれている。

現在の主要な道は、近代以後に丘陵等を 切り開いたもので、江戸時代以前には急峻 な地形から、陸路よりも海路を利用するこ とが多くあった。隣村に行くためには厳し い峠道を超える必要があり、村同士の交流



図 2-34 島内の主要道路

を困難なものにしていた。草加部村(旧内海町)と池田村との間にある室生峠は、截然と両村を分かち、 中世以来東西の文化圏を形成していた。

明治 19年 (1886) 頃から道路の改良が行われ、交通の妨げとなっていた峠道の解消のため、明治 38年 (1905) には池田室生間の城山隧道、大正 4年 (1915) には池田中山間の高坂隧道が開通し、現在の形の路線が昭和 40年代 (1965-75) 頃にほぼ固定された。平成 22年 (2010) には橘峠を迂回する橘トンネルが開通するなど、改良が加えられている。

徒歩の観光客の主な交通手段は、島内に張り巡らされた路線バス網である。島内の路線バスを運営する

小豆島オリーブバスは、島 民の大切な交通手段である 港や商業地、主要観光地を 路線で結ぶなど、徒歩の観 光に欠かすことはできない ものである。主には土庄港 (土庄町)を起点として、坂 手港方面、福田港方面を主 とするほか、中山間である 中山地区を結ぶ中山線、エ ンジェルロードや二十四の 瞳映画村を結ぶ田ノ浦映画 村線、草壁港と寒霞渓ロー プウェイの起点であるこう うん駅を結ぶ神懸線等があ る。三都半島を結ぶ三都西 線については、町営バスが



図 2-35 バス路線図

運行されている。

神懸山(寒霞渓)(国名勝)は、路線バスが草壁港から紅雲亭まで運行され、その先は徒歩による遊歩道またはロープウェイにより、山上の三笠公園に至るルートが確保されており、寒霞渓観光の中核となっている。また、土庄町馬越から小豆島町神懸通に至る県道(27 号:土庄神懸線、29 号:寒霞渓公園線)や、福田港、大部港のフェリー着岸港から至る県道があり、島内の各所から自動車で寒霞渓山頂へ乗り入れることができる。

第3節 小豆島町の歴史的背景

(1) 先史・古代

島内には各時代の特徴的な遺跡・遺物が知られている。島内の最古のものとして、土庄町の戸形遺跡等で旧石器時代の遺跡が確認されているが、本町内では確認されていない。

縄文時代の遺跡としては、後期のほら貝岩洞穴遺跡 (町史跡)や殿山遺跡がある。ほら貝岩洞穴遺跡は、 寒霞渓内の洞窟で、縄文時代後期から古墳時代までの 遺物が出土しており、狩猟の際の一時的な住まいとし て長期にわたり使用されたと考えられている。

弥生時代には、中期中頃以降に山裾や高地で居住していたことが確認でき、極ヶ谷遺跡、粟地遺跡、釘ヶ谷遺跡で土器や石器が出土している。極ヶ谷牛飼場遺跡では、平形銅剣と袈裟襷文銅鐸(国重美)がともに出土しており、他地域との交流が活発であったことが確認できる。このほか町内遺跡から弥生時代中期末の製塩土器が出土しており、この頃から製塩が始まったと考えられる。後期末から古墳時代前後には海浜部の遺跡も目立つ。

古墳時代には、組み合わせ式箱型石棺を埋葬施設とする特徴的な古墳が見られる。古墳時代前期の積石墳墓 I 基と後期の箱式石棺墓 5 基が確認された弁天島古墳群 (町史跡)、四獣鏡 (町有形) が出土した亀尾山古墳から、島外やヤマト王権との関係をもつ有力な豪族の存在が想像される。また、古墳時代後期においても製塩が行われている。

小豆島は『古事記』や『日本書紀』に描かれる国生 み神話の 10 番目に生まれた「大野手比売」として描 かれ、その後は応神天皇の行幸地として登場する。島 内には応神天皇の旧跡地と伝わる場所が多数あり、こ れらは中世以降に形成された島内八幡神社の縁起に まとめられ、現在も寺社や地名として伝承されてい



図 2-36 四獣鏡(亀尾山古墳出土)

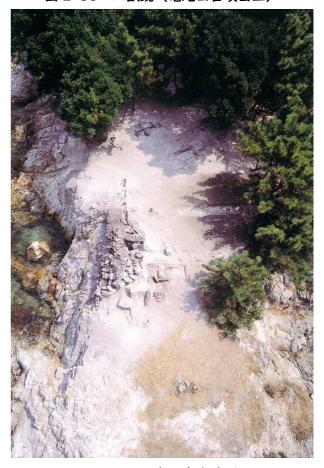


図 2-37 弁天島古墳群

る。入部 (蒲生周辺)、草加部は王権に奉仕する集団とされる名代であったとされ、塩の生産との関連が 注目される。同時期には、「小豆首」という有力豪族の存在も確認できる。

古代には、備前国児島郡三宅郷の一部(和名抄)もしくは備前国児島郡小豆郷(平城京跡出土木簡)であったと考えられ、調塩を示す木簡から塩の生産を行っていたことが知られている。

(2) 中世

荘園の展開に伴い、島内ではいくつかの荘園が散見される。中でも「肥土庄」は、石清水八幡宮の神事に用いる「御白鹽」を採取する場所とするため、敦実親王(宇多天皇皇子)から同宮に寄進された。以後、中近世に渡って小豆島の塩が珍重されていく過程で、小豆島が「塩の荘園」の役割をはたした。その中で、他地域との交流も活発化した。蒲生遺跡の中世前半期の建物跡や鉄製品の製作遺構、和泉産の瓦器椀や吉備系土師質土器はこれらを裏付けている。このほかに、古代から中世の仏像や石造物の存在からも地域を越えた交流や経済活動が確認でき、特に石造物は火山石(さぬき市)や天霧石(善通寺市)等の四国側の石材と御影石(兵庫県)等の本州側の石材の製品が混在している。

南北朝期頃になると、備前国児島を本拠とする武将 佐々木信胤が登場する。信胤は、北朝から南朝に鞍替 えして戦った武将で、延元4年/暦応2年(1339) 3月に小豆島一円を領して、瀬戸内海最高峰である星 ケ城山の山頂に星ケ城(県史跡)を築き、これを中核 として各地に支城を構築して島一円を要塞化したと される。正平2年/貞和3年(1347)に細川師氏に 攻められ、ひと月以上の激戦の末敗退し、その後正平 17年/貞治元年(1362)の白峰合戦に参戦し消息不 明となったとされる。鞍替えは、菊亭中納言に仕えて いたお妻の局を巡って高師秋と争ったことが原因と される。信胤はお妻の局を伴って小豆島に入ってお り、島内各所に関係遺跡や伝承が残るほか、信胤とお 妻の局の伝承は、悲恋物語として現在も地域の民俗芸 能の題材とされている。信胤敗退後は、細川管領領と され、讃岐国の勢力下となる。

(3) 近世

ア 小西行長のキリスト教伝播

織豊期において、小豆島は天正 |3年(1585) 頃羽 柴秀吉の蔵入地(直轄地)となった。秀吉は小西行長 らを代官として設置した。天正 |4年(1586)には、 小西行長によって京より官教師が派遣され、島で布教



図 2-38 鎌倉後期の火山石製層塔 (白粉石の多重塔(町有形・蒲野地区))

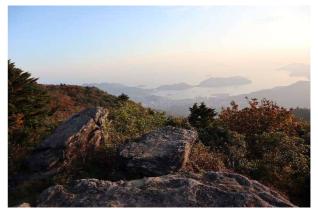


図 2-39 星ヶ城跡から見た内海湾



小西行長によって京より宣教師が派遣され、島で布教 図 2-40 菅家文書「差上申一札之事」(町有形) (キリシタン類族死去に伴う報告)

が行われ、その結果 1,400 人を超える信者が洗礼を受けたとされる。信者らは、15m を超える十字架を立てるとともに、旧来の神仏を残らず破壊した。このような混乱もあってか、秀吉の伴天連追放令(天正 15年(1587))以降、徳川幕府によるキリシタン禁制へと引き継がれる中で、キリシタンとその子孫たちは厳しい監視と弾圧を受けることとなった。信者は潜伏キリシタンとなり、18世紀中頃までは信仰を続けていたとされる。

イ 大坂城改築の天下普請

元和6年(1620)から寛永6年(1629)にかけて 徳川秀忠による大坂城改築の天下普請が行われた。瀬 戸内海の各地には、石材の花崗岩を求めて多くの大名 が石丁場を開いた。

小豆島には7藩の大名による丁場が設けられ、大坂城に花崗岩が運ばれた。町内には、筑前福岡藩黒田家が担当した6箇所の岩谷地区の石丁場(国史跡)、伊勢津藩藤堂家の福田地区の石丁場(町史跡)、筑前柳川藩田中家の丁場である石場地区の石丁場(町史跡)が設けられた。残石の一部は、大名家や庄屋によって管理



図 2-41 大坂城石垣石丁場跡 小豆島石丁場跡 (豆腐石丁場跡)

された。特に岩谷地区の残石は、黒田家から派遣された番屋が土着し、近代まで管理されたことから、当時の残石や状況を色濃く伝えている。この普請をきっかけに採石業が主力の産業の一つとなる。

ウ 加子役指定と解除

江戸時代に入ると、小豆島は幕府直轄領(天領)となるとともに、大坂の陣後の元和元年(1615)には幕府から加子浦(加子役)の指定を受ける。加子浦は、有事などにあたって、幕府の求めに応じて水夫と船を供出する義務を負う代わりに、税が減免される特権を持つことができる制度である。

このように有力者たちの求めに応じて水夫と船を供出した事例は、室町時代の細川管領領時代から



図 2-42 島原の乱矢文(壺井家文書)

確認ができ、秀吉の時代には方広寺大仏の造立や朝鮮出兵にも携わり、江戸時代には島原の乱(寛永 14 年(1637))にも水夫や船を供出し、その際に一揆勢の農民方から飛ばされた矢文が現在も伝えられている(壺井家文書(町有形))。江戸時代においては、島原の乱以降、大きな騒乱等が発生することがなくなったため、元禄 2 年(1689)に加子浦指定を解除されることとなり、その特権を失うこととなった。

エ 加子役解除による増税と正徳越訴事件

慶長 10 年 (1605) の検地では、土地の広さ、生産 高の把握により百姓から年貢米の徴集や軍役など全国 的な統一基準の下で実施された。耕作者が土地の権利 を持ち、石高制となり、国絵図も作成された。

一方で、延宝 5 年 (1677) の備中足守藩木下宮内の検地は竿の長さを 1 間=6 尺と定め、田畑の等級を改め、加子役の廃止による畠は田と同様に分米としたため、石高が向上し、年貢が増額された。延宝 8 年 (1680) 以降、大庄屋や年寄は、幕府の巡見使等に年貢減免嘆願を行ったが効果は薄かった。



図 2-43 平井兵左衛門終焉の地(町史跡)

正徳元年(1711)池田村を中心に福田村、吉田村、

肥土山村などの有志が協議し、池田村庄屋の平井兵左衛門氏政が年寄彦兵衛を帯同し、江戸へ下向し、勘定奉行平岩若狭守へ直訴した。小豆島を預り地としていた高松藩は、この行為を「越訴」とし、氏政を村内引き回しの上、獄門・斬首に処した。また、この越訴事件の関係者の多くが処罰された。福田村の大庄屋の湊九左衛門は、家財・田畑の没収等重い罪が課され、後に高松で獄死した。

島民はこれを悼み、地域を救った「義民」として、当地には氏政を祀った五輪塔が建立され、現在も「義民平井兵左衛門」として祀り、毎年法要が営まれる。また近代には島出来の歌舞伎の演目の題材にもなった。この事件を描いた演目『金ヶ崎湊荒波』(『島義民伝』とも)は、明治 28 年(1895)に初演されてから島民から大きな人気を得て、何度も上演された。

オ 害獣との戦い

江戸時代中期頃、害獣の農作物被害を減らすため、 島内を取り囲むように猪鹿垣(しし垣)が築かれた。総 延長は30里(約120km)に及び、築造にあたっては、 村々でルート等を協議し、築造や経費負担、維持管理 は村民が総出で行ったとされ、完成までに半世紀を要 したという。

地域によって特色があり、花崗岩の採掘が盛んに行われた地域では花崗岩の石積み、花崗土の多い地域では土塀、大坂城の石丁場のある地域では切り出された角石が猪鹿垣の一部として使用される等の材質の特徴や、イノシシやニホンジカを捕獲するための落とし穴



図 2-44 土塀の猪鹿垣(長崎地区)

や、猪鹿垣に門と当番制の門番を設けた地域もあり、地域毎に生活に根付いたさまざまな工夫が見られる。この遺構は島内各所に現存しており、一部が文化財に指定され保護されている(「長崎のしし垣」(町有民))。

カ 在郷商人層の台頭と農村社会の転換

近世の小豆島は、天領として代官所等の支配を受けたが、離島という特質性から、年番庄屋と大庄屋が取り仕切る体制が取られた。江戸時代中期頃になると、近畿経済圏に近しい立地から廻船業や製塩業が大いに栄え、文化文政期(1804-29)には素麺業や醤油醸造業などが発達し、大庄屋を凌ぐ実力をもつ商業資本家が登場し、従来の庄屋・年寄家の権威は弱まり、農村社会に変動を生じさせた。

(4) 近現代

ア沿革

明治4年(1871)の廃藩置県により、津山藩領であった西部六郷は津山県に属し、東部三郷は丸亀県に属したが、第一次香川県の設置により島内一円が香川県に編入された。

明治政府は、庄屋等の名称を 廃止し、戸籍法を制定して戸 長・副戸長を置き、合わせて区 (後に大区・小区)を設置した。 香川県は、明治 21 年 (1888) まで他県との合併と独立を繰 り返していたため、伴って小豆 島の区も図のように変遷した。 (図 2-45)

明治 || 年(1878)には、太政官布告で郡区町村編成法

			小豆島町 ※大部は現在土庄町に属する 土庄町											
県域名 年	年代	大区	小豆島町 ※大部は現在土庄町に属する											
			草加部	福田	大部	池田	二生	三都	渕崎	上庄	肥土山	小海	豊島	土庄
第1次	M4,11													
	~	_	第23区	第24区	第27区	第28区		第25区 第29区 第				第26区		
香川県	M6,2			71-21-2										
	(区はM5,5から)													
名東県	M6,2													
	~	第27大区	第1小区			第2小区			第3小区					
	M8,9	33277(E				N3237E								
	(区はM7,2~)													
第2次香川県	M8,9∼	第5大区		第1小区		第2小区		第3小区						
	M9,8	弗5大区	弗1小区			第2小区		第3 小 区						
	M9,8∼	شعــــــــــــــــــــــــــــــــــــ	第1小区			第2小区			第3小区					
	M9,8	第7大区												
愛媛県	M9,8∼	第3大区	第1小区		第2小区			第3小区						
	M12,9	第3 ∧区	弗I小区			新Z小区		売3 小区						
	M12,9~		.i. — 20 / 72 MOID .i. — 20 \											
	M21,12	小豆郡(愛媛県小豆郡)												
第3次 香川県	M21,12~	小豆郡(香川県小豆郡)												

図 2-45 第3次香川県成立までの変遷

が発布され、区制が廃止された。旧讃岐国では 7 郡を設置することとなり、小豆島と豊島を含めて「小豆郡」が誕生した。その後、明治 23 年(1890)には明治の大合併によって 16 か村となり、昭和 28 年 (1953) 以降の昭和の大合併では 3 町、平成 18 年 (2006) の平成の大合併では現在の 1 郡 2 町の体制となった。

イ 近現代の功績

近現代の小豆島は、現在の産業・文化・観光等が発展・定着した時期である。小豆島の近現代史で特筆的なものとして、小豆郡長の森遷の功績が挙げられる。

森は、郡長や郡会議長を歴任した自治功労者である と共に、神懸山保勝会会長として寒霞渓の保護と普及 啓発や小豆島素麺同業組合や小豆島石材組合、小豆島 霊場会の設立等に関わり、現在の小豆島の基礎を形作



図 2-46 森遷顕彰碑(寒霞渓・四望頂)

った。また『小豆郡誌』、『神懸山志』、『小豆島志料』等の地誌の編纂にも携わり、特に『小豆郡誌』は、 当時の各村調書の作成、古文書類の収集、古老への聞き取り等を行い、7年の歳月をかけて完成させた。

このほか、神懸山(寒霞渓)は江戸末期から近代にかけて、島民によって名勝の保護・観光地開発が推進され、島外に向けて広く宣伝された。多くの文人や観光客が訪れ、この情景を唄った詩歌や絵画が多数残される。

ウ戦争

近代以降行われた戦争では、本町では空襲などの被害は見られなかったが、多くの島民が従軍し、多数の 犠牲者を出した。

町内には、防空壕跡などの遺構や、慰霊碑や忠魂社 等のほか、日露戦争の戦勝記念のために設置された石碑「戦勝記念碑」や「日露戦争記念橋」のほか、古江 地区には、太平洋戦争末期に設置された特殊潜航艇 「蛟竜」の基地等の関連施設があったとされ、それを 伝える石碑のみが伝承されている。

エ 壺井栄と『二十四の瞳』

壺井栄は、坂手地区出身の小説家・児童文学作家である。昭和の初めころから執筆をはじめ、昭和 13 年 (1938) の出世作「大根の葉」の発表以降、300 篇を超える詩や小説を生み出した。代表作である『二十四の瞳』は、昭和 27 年 (1952) に発表され、昭和 29 年 (1954) に木下恵介監督の手で映画化されて以降、何度も映像化された。映画の舞台となった小豆島は、観光地として脚光を浴びた。映画では、島内のさまざまな景勝地で撮影が行われたほか、昭和初期の村を再現した映画のセットは、二十四の瞳映画村として保存され、観光地として活用されている。

その他にも、小豆島を主題とした作品も多く、坂手村の方言を駆使したものや昔の小豆島で撮影された作品もある。『明日の花嫁』(昭和 37 年 (1962) 製作)では、小豆島各地で撮影が行われ、昔の風景が映像化され、当時の小豆島の様子を知る手がかりにもなる。

栄の作品は、反戦のみならず、子どもや女性を主題として、現実の庶民生活の中にある互いの助け合い、たくましくおおらかな人間愛が描写される。貧困や病気、障害、封建的な家制度、社会の変化に翻弄される



図 2-47 特殊潜航艇基地跡の石碑(古江地区)



図 2-48 壺井栄



図 2-49「二十四の瞳」の舞台となった分教場

弱者の立場に立って、その問題解決を女性の自立や子供たちの革新性に託しているとされ、時代に翻弄 されながらも力強く生きる女性像が描かれており、現代においても多くの人を惹きつけている。

また町内では、夫の壺井繁治、黒島伝治などの近代文学者を輩出した。

(5) 多様な文化や信仰

ア 農村歌舞伎

小豆島農村歌舞伎(県無民)は、江戸時代以来の伝統を持つ地芝居である。現在は、中山地区と肥土山地区(土庄町)のみで継承されているが、かつては島のいたるところに舞台が築かれ、村々の祭礼や祝い事で歌舞伎が奉納された。役者、裏方を地元住民で行う地芝居の形式を受け継ぎ、地域の歴史等に基づいた「島出来」の独自演目や、「デコ芝居」と呼ばれる他に類を見ない芸も見られ、小豆島を代表する民俗芸能である。

小豆島は、古代から瀬戸内海の交通の要所で、大坂や兵庫と西国や四国への中継地として頻繁に往来があった。歌舞伎も上方からかなり早い時期に伝えられたと考えられ、17世紀後半の歌舞伎が始まって間もない頃に、金毘羅への途上の旅役者が歌舞伎を伝えた可能性がある。その後、元禄期頃(1688-1709)には地芝居が始まっていた対岸の兵庫・播磨の影響下に、18世紀初期頃から小豆島では農村歌舞伎が始まったと推測される。上方や兵庫・播磨あるいは讃岐から入ってくる歌舞伎や地芝居の情報は、福田や大部・池田・土庄といった港にもたらされ、すぐに山間部にも伝わり、氏神の祭礼の奉納芝居の中に昇華された。

明治になり、幕藩の芝居禁令から解放され、奉納芸の名目がなくとも自由な歌舞伎上演が可能になると、祭礼以外にも還暦や古稀などの長寿祝、新築家の落成や新造船の進水、会社の創業祈念などの祝など、様々な機会を捉えて歌舞伎を上演する「余興芝居」も行われるようになった。最盛期の明治から昭和初期頃には、歌舞伎は島の唯一の娯楽として、島民の生活に無くてはならないものになり、島内には30ヶ所以上の常設舞台と、他に仮設舞台で数多くの歌舞伎上演が行われた。小豆島での歌舞伎はこのような契機のもと隆盛を極めた。

現在は、中山地区と肥土山地区に各々保存会が組織



図 2-50 中山農村歌舞伎



図 2-51 中山農村歌舞伎保存会のデコ芝居 (『壺阪霊験記』)



図 2-52 豪華絢爛な歌舞伎衣裳(中山地区)

され、地域住民を上げて継承活動に取り組んでいる。本町の中山地区においては、春日神社境内の中山の 舞台(国重有民)において、春日神社の例祭の際に農村歌舞伎が奉納されている。

イ 小豆島ハ十八ヶ所霊場(遍路)

小豆島ハ十八ヶ所霊場は、四国ハ十八ヶ所霊場をモ デルとして島内の真言宗寺院を中心に、庵坊を加えて 93ヶ所の霊場(88ヶ所の霊場と奥の院、別格霊場を 含む)を設定したもので、「島四国」と称される。関西 方面に近く、風待ちの港として栄えた坂手地区から島 を時計回りにめぐるよう配置されている。急峻な山岳 に設置された山岳霊場や海辺の霊場が多く、洞窟や岩 場など、それぞれの土地の特有な地形を生かした札所 が多いことに特徴があり、弘法大師空海が京と讃岐を 往復する際に立ち寄り、修行をした場所であるという 伝承がある。

起源は、『小豆郡誌』では貞享3年(1686)として いるが、往来手形等の資料から江戸中期の宝暦年間頃 (1751-64) と類推され、天保年間(1831-45) に かけて盛んに行われるようになったとされる。創始の 時期については明確となっていないが、札所として整 備される以前の中世頃から西の滝(池田)や東の滝(洞 雲山・坂手)、湯船山(中山)などの山岳霊場において、 修行を行った修験山伏らの活動があったと推測され ている。また構成される寺院の内には、行基や弘法大





図 2-54 お遍路さん(第8番札所

師の開基と伝えるものが多いが、中世にはいくつかの寺院を除いて簡素な庵坊が置かれ、近世の檀家制 度の確立以降堂塔のある寺院が村々に整備されたとされる。

霊場の全体像が明らかとなるのが、嘉永年間(1848-55)頃に成立した『小豆島名所図会』である。 ここでは、札所の本尊、由来、景観、霊験記や島内の地誌や景勝地、産業等が、挿絵とともに記されてお り、この時期の小豆島の様子を伝える。

江戸時代の遍路は、病弱者や老人が中心で、一家の口減らしのため水盃を交わして家を出た者が多く、 「捨往来」と言われる往来手形を持ち、これを残して島を死に場所とした者もいた。島内各村の年寄家に 残る「捨往来」からは、江戸、上野、伊予、備後等の全国各地から多くの者が訪れ、他界したことが読み 取れる。島の人たちも、先祖供養や自己の後生のため、巡拝者を迎え、宿泊を許したり、茶菓を供したり した。これを「お接待」といい、現在でも続けられている。近代以降、病気平癒や後生を願う遍路へと変 容し、山陰・山陽を中心に各地から来島し、約1週間の行程で巡拝した。

明治維新後、廃仏毀釈政策により札所寺院も大きく変容し、大正期にかけて大きく衰退したが、大正2 年(1913)に遍路文化の普及啓発を目的とする小豆島霊場会の創設により復興され、昭和初期には年間 数万人にまで回復した。戦中戦後の衰退期を経て、昭和後期には小豆島の観光地化と合わせて再び活況

を呈し、昭和 58 年 (1983) には巡拝者が年間 16 万人に達したが、現在は減少傾向である。かつては、 村々に遍路宿と呼ばれる安価な宿泊施設があったが、現在は大幅に数を減じている。

構成寺院のうち、開基は未詳な寺院が多いが、行基、鑑真、弘法大師等の高僧の開祖と伝わるもの(愛染寺、極楽寺、観音寺など)、中近世の僧侶を開祖と伝わるもの(明王寺、光明寺、保安寺など)、佐々木信胤の祈願所を開基と伝わるもの(湯船山、常光寺など)等が見られるほか、庵坊や他の寺院から発展・再編されたもの(洞雲山、正法寺、観音寺など)など、それぞれに歴史的な経緯を持つ。霊場は、主に寺院(納経所)、山岳霊場、堂庵で構成されている。

(寺院)

寺院は、主に納経所が設置されているところで、島内に 28 ヶ寺 (番外霊場含む)、小豆島町内には 16 ヶ寺ある。これらは住職が常駐しており、地域のお寺として機能している。成立までの経緯は、寺院によって異なるが、近世に成立したものや、整備されたものが多い。

平安期以降の古い仏像や石造物、什器等を所有している寺院や、明治の廃仏毀釈によって八幡神社等から本尊や什器を受け継いでいる寺院も見られ、多様な文化財が伝承されている。



図 2-55 第 3 I 番札所 誓願寺

(山岳霊場)

山岳霊場は、急峻な山岳地帯に 形成された寺院で、洞窟や湧水の 霊地に形成されており、古来山岳 修験の行場とされてきた。現在は、 寺院の管理する「奥の院」であり、 島内に 15 ヶ寺、小豆島町内には 10 ヶ寺ある。

主には、坂手洞雲山一帯を霊地 とした洞雲山や隼山、碁石山、嶮岨 山系の湯船山や清瀧山、石門洞、仏 ヶ滝のほか、大麻山の西の滝、仏谷 山等がある。

洞雲山は、池田地区の「西の滝」 に対して「東の滝」とも呼ばれ、両 者ともに山岳崇拝の霊地であっ て、修験、山伏の徒が足繁く来て 修行をしたとされる。山中には

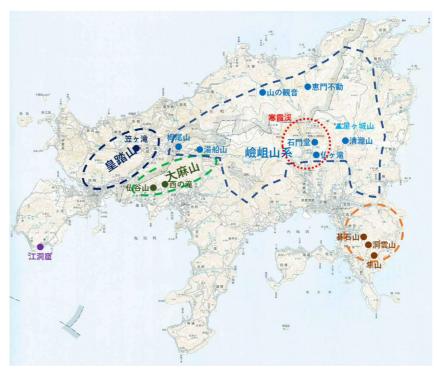


図 2-56 山岳霊場と山系

行場の跡がいくつか残っているが、島の中央を走る星 ケ城(安田)から四方指(神懸通)にわたる嶮岨山、 嶮岨山から西の皇踏山(土庄町淵崎)に向けて山岳を 跋扈修業した修験山伏の中心道場がこの聖地であっ たと考えられている。

中世山伏については、佐々木信胤との関連がある。 信胤は、紀州熊野系で本山派の児嶋五流の山伏の援助 を得たとされ、特に信胤の伝承をもつ湯船山や、星ヶ 城に連なる清瀧山から碁石山、洞雲山、隼山の一連の 山岳霊場は、絶えず山伏が往来したとされる。信胤と 細川師氏との争乱(貞和3年(1347))も、この周辺 一体を中心としたのではないかと想像されている。

(堂庫)

堂庵は、寺院に付属している小規模な寺院で、地域の墓地の庵や集会所として活用されているものもある。島内に 5 l ヶ所、小豆島町には 28 ヶ所あり、霊場の半分を構成し、時代によって変化している。

多くが小規模寺院であるが、文化財として貴重な仏像や石碑、石仏などの石造物を所蔵するほか、御詠歌や講、庚申信仰などの民俗信仰、観音堂石井等の遺跡、風穴などの特異な自然環境を伝えているものも多く、景勝地も多い。遍路を行うことで、小豆島の「地域の宝物」を体感することができる。

(遍路道)

遍路道は、霊場と霊場を繋ぐ道で、古来お遍路さんが往来した祈りの道である。多くは、現在の生活道路(車道)として整備され、使用されなくなった道は廃絶しているが、一部古道が残されている。これらの道は寺院や霊場会、地域団体等によって管理されている。主な遍路道は以下のとおりである。

- 2 碁石山-I洞雲山-3 奥の院 隼山
- ・ 42 西の滝-43 仏谷山
- ・ 御水大師(大師の水)-25 誓願寺庵-24 安養寺
- · 88 楠霊庵 12 岡ノ坊
- · 44 湯船山-47 栂尾山
- · 5 堀越庵-6 田浦庵
- 81 恵門ノ滝-82 吉田庵
- · 28 薬師堂-29 風穴庵-30 正法寺



図 2-57 第2番札所 碁石山上からの眺望



図 2-58 第 29 番札所 風穴庵裏の「風穴」



図 2-59 第 11 番札所観音堂の「石井」(町史跡)



図 2-60 遍路道(42 西の滝-43 仏谷山)

ウ 八幡神社と秋の例大祭

島内の八幡神社では、氏子の各地区から奉納される「太鼓台」と呼ばれる山車を中心とした秋の例大祭が行われる。島内の最も大きな祭礼で、祭礼が行われる2週間にわたって、島は活気づく。本町においては、例年10月11日挙行の葺田八幡神社(福田地区)、15日挙行の内海八幡神社(苗羽地区)、16日挙行の亀山八幡宮(池田地区)があり、神社ごとに特徴的な奉納形態、付属芸能等がある。

(葺田八幡神社)

葺田八幡神社は、福田地区・吉田地区と、土庄町小部地区を氏子圏とする神社である。延長4年

(926) 創始の伝承をもち、名称は応神天皇行幸に際して、刈穂を用いて行宮の屋根を葺いたことに由来する。祭礼の創始は未詳だが、正徳2年(1712)の舞台をしつらえての狂言「大江山」上演や寛永3年(1626)の小部地区しし舞奉納記録が残るなどの歴史を伝える。

祭礼では、岡地区、尾崎地区、浜地区、小部地区の 太鼓台奉納とともに、吉田地区、浜地区のネリ(長刀 おどり)と、小豆島では唯一の岡地区、尾崎地区、浜 地区、小部地区のしし舞奉納が行われる。太鼓台の奉 納では、太鼓台の片側を上げたまま落とさないように 馬場を練りまわる等の特徴が見られるほか、岡地区や 浜地区等のしし舞は、福田地区の正面にある家島(兵 庫県姫路市)や庵治(高松市)から習得したという伝 説もあり、周辺地域との交流による関係を見出すこと ができる。

(内海八幡神社)

内海八幡神社は、内海地域(旧草加部村)の各村を 氏子圏とする神社である。他社と同様延長4年 (926)に勧進されたという伝承を持つ。江戸中期 以降、廻船業が盛んになると、諸国の廻船が内海湾 へ出入りすることが増え、伴って島外の廻船業者や 漁民らの信仰を集めた。現在の社地のある山の頂に 元々の宮があったが(応神天皇の伝承地)、中世末期



図 2-61 太鼓台奉納(亀山八幡宮例大祭)



図 2-62 葺田八幡神社例大祭 太鼓台奉納



図 2-63 葺田八幡神社例大祭 しし舞奉納



図 2-64 内海八幡神社例大祭

頃から近世初め頃に海賊の襲来や戦乱を避けて、一時期上村(現在の神懸通)に移され、その後現在の 地に安置されたという。

祭礼では、西村地区、草壁地区、安田地区、馬木地区、苗羽地区、坂手地区の各地区から太鼓台が奉納される。奉納では、太鼓台の片側を上げたまま落とさないようにピタッと止まる「カエシ」や、太鼓台を真上に放り上げる等の特色ある技能的な太鼓台奉納が見られるほか、馬木地区と橘地区からは20m程の大きな幟を倒すことなく、さまざまな技を披露する妙技「幟さし」(町無民)が奉納される。内海八幡神社の縁起に基づき、応神天皇の小豆島行幸の際、案内役を行ったとされる炭山家の子孫が代々天狗面を被り、橘地区の提灯行列とともに、渡御する





図 2-65 内海八幡神社例大祭 幟さし

八幡神社の神輿を馬場まで先導するといった故事に基づく奉納も行われている。また、昔の低い鳥居をくぐる際に、太鼓台の高さを下げるための「櫓落とし」と呼ばれる特殊な機構を備えたものが見られ、 鳥居が高くなった現在においても鳥居下で「櫓落とし」を行う地区もある(苗羽地区)。

祭礼の創始については、天明 2 年(1782)に八幡神社の所在する馬木地区において疫病がまん延した際、祭礼を行ったところ、疫病が治ったことに由来するとされ、かつては余興として壬生狂言や浄瑠璃が行われ、大いに賑わったという。現在馬木地区の金羅明神社の夏祭りで行われている民俗芸能「ヤッシッシ」も、元々は太鼓台行列の露払いの役割をもっていたとされ、現在とは異なる様相であったこ

(亀山八幡宮)

とが伺える。

亀山八幡宮は、旧池田町を氏子圏とする神社である。他社と同様延長 4 年(926)に勧進されたという伝承を持つ。当社に現存する最古の棟札は応安 4 年(1371)と古く、鎌倉期の地頭 須佐美紀伊守によって社殿が築造されたとされる。隣接する長勝寺に収蔵される「木造伝池田八幡本地仏坐像」(国重文)は、平安後期のもので、元々本社の本地仏であったが、廃仏毀釈により当寺に移されたとされる。

祭礼では、伊勢音頭を唄いながら行う「ミヤノボリ」、太鼓台をほぼ真横に倒す「カエシ」や、太鼓台を真上に上げて地区同士で我慢比べをする「カキアゲ (カキクラベ)」、太鼓台を真上に放り上げる「ホリアゲ」等の特色ある技能的な太鼓台奉納が見られるほか、和船で運んだ太鼓台を海から押し込む神浦地区の「オシコミ」(町無民)や、奴踊りと年の縁起



図 2-66 亀山八幡宮例大祭 太鼓台奉納



図 2-67 亀山八幡宮例大祭 オシコミ

物を作ってダンジリに乗せて奉納する池田五地区輪番の「オオネリ」(町無民)、小学生の女の子による 「岩戸の舞」等の特徴的な民俗芸能が見られる。

また、祭礼の行われる馬場には、石積みで形成された桟敷席である池田の桟敷(国重有民)があり、本祭礼を特色づける。同神社に伝わる江戸時代の祭礼を描いた絵額(町有形、文化 9 年(1812))には、池田の桟敷や太鼓台の奉納のほか、ダンジリでの芝居奉納や流鏑馬、ハリバタ(船の競争)、相撲等現在とは異なる姿の祭礼の様子が描かれており、本祭礼のもつ歴史性を伝えている。

エ 地域の神仏と祭礼

町内の神社は、郷社である八幡神社のほか、枝村や小集落単位で祀られる小さな神社や祠がある。各地域には、産土神社の荒神社や、生業に関する塩釜神社、水に関する天神神社や水天宮、海に関する恵比寿神社や和霊神社、金毘羅神社、厳島神社等、山に関する山神社(大山積神社)、島の歴史に関する阿豆枳島神社や城崩れ、山伏修験に関する熊野神社や天津神社(妙見神社)、祇園社(八坂神社)、民間信仰に関する稲荷神社、歯神、道祖神等、古い歴史をもつとされる皇子神社や高木明神もあり、さまざまな祭礼や行事が行われている。

(小正月)

小正月の頃には、「とんど」がある。とんどは、松 や竹を芯として、子どもたちが地域を回って集めた 正月の注連縄飾り等を円すい状に空高く組み上げて 焚き付け、焼く伝統行事である。旧内海町域で伝承 されており、地域の子どもたちが主体となる古い形 が伝承されている。また竹生地区(西村地区)にお いて、「村祈祷」と呼ばれる近世の村寄合の形式を有 する地域の活動も行われている。

(各神社の夏祭り(旧暦6月頃))

半夏生の頃には、中山地区の「虫送り」がある。これは、火手とよばれる松明を田にかざしながらあぜ道を歩き、害虫を退治して豊作を願う行事で、300年程度の伝承があったとされ、長年休止していたが、映画「八日目の蝉」の撮影をきっかけに復活した行事である。中山地区では棚田頂点部の湯船山蓮華寺と棚田中部の荒神社から中山の舞台にむかって歩くもので、



図 2-68 坂手稲荷明神神社



図 2-69 とんど(安田地区)



図 2-70 虫送り(中山地区)

点火にあたっては、明王寺住職(かつては浄土寺住職)による護摩焚きが行われる。かつては、殿川の下流においても虫送りが行われ、下流の肥土山地区、黒岩地区、上庄地区(全て土庄町)へと虫が送られたが、現在は中山地区と肥土山地区のみで行われる。

7月には、各地域の神社の例祭(荒神祭、弁天祭等)が行われる。祭礼では、一般的な夏祭りが行われるが、特徴的なものでは、ヤッシッシと馬木おどり(金羅明神社(馬木地区))や、太鼓台奉納(カンスケ太鼓:山王神社・竹成神社(安田地区))、子ども相撲(福田八幡宵祭)、しし舞(妙見神社(二面地区))の奉納等があり、地域の特徴に応じた祭礼が行われている。

(盆行事)

小豆島には特徴的な盆習俗や行事が伝承される。川めし(町無民)は、盆行事の一つで8月 14 日に行われる。早朝の暗いうちから河原へ行き、石でかまどを作って、釜で五目飯を炊く。出来上がると、木の葉によそって並べて無縁仏(餓鬼)の供養を行い、家族でそれを食べるものである。かつては町内のほかの地区でも行われていたが、現在は別当川流域の神懸通地区のみで行われている。

14日の夜には、安田おどり(県無民)が踊られる。これは、安田地区に伝承される盆踊りで、地域の夏祭りで奉納される。踊りの型は元禄期(1688-1704)頃の風情を伝えると言われ、江戸末期に大坂から移住して小豆島農村歌舞伎の発展を下支えした振付師 初代嵐璃當によって「扇の手」が加えられたものが現在の型として伝承される。歌詞には、安田地区や小豆島の風情を表現するもののほか、佐々木信胤の伝承も含まれており、島民の信胤に対する愛着の念が感じられる。その他にも、嵐璃當の弟子が関わった「馬木おどり」や「苗羽おどり」、「猪谷音頭」等、地区の特徴をもつ盆踊りも伝承されている。

各家々では、「ショウロダナ(ショウラダナ)」と呼ばれる盆棚を玄関先等に出し、花や膳、野菜、果物を供え、住職がお経をあげるという習俗や、仏壇に編ん



図 2-71 川めし(別当川)



図 2-72 安田おどり (男踊り)



図 2-73 安田おどり(扇の手)



図 2-74 ショウロダナ

だ素麺を掛ける「オイナワソウメン」、廃絶した七夕行事を地域の地蔵供養として復活させた「スコスコドッコイ」(苗羽地区)等も行われている。

(秋の祭り)

秋の祭りは、先に掲げた農村歌舞伎や八幡神社の例大祭を主とする。八幡神社の例大祭では本祭に先立って、各地域の氏神の祭礼として、地域内で太鼓台を奉納する宵祭が行われる地域もある。

また、小豆島では、夏から秋にかけて、伊勢大神楽(代々神楽)の一団が島内を回る。これは厄払いのしし舞や「放下芸」と呼ばれる曲芸を演じながら西日本を巡業する芸能集団で、家々や地域の祭礼等でしし舞等の奉納が行われている。

第4節 「地域の宝物」の概要

(1) 指定等文化財の概要と特徴

小豆島町には、国指定文化財が 9 件、国登録文化財が 90 件、県指定文化財が 9 件、町指定文化財が 72 件所在している。

表 2-75 町内の指定等文化財の状況(令和 4 年 8 月現在)|

			国		県指定	町指定	合計	
		指定	登録	重美2	宗	刊佰疋	ㅁ히	
	建造物	1	89	0	0	3	93	
	絵画	0	0	0	0	3	3	
	彫刻	I	0	0	2	5	8	
有形	工芸品	I	0	1	0	8	10	
文化財	書跡・典籍	0	0	0	0	1	1	
	古文書	0	0	0	0	11	11	
	考古資料	0	0	0	0	1	1	
	歴史資料	0	0	0	0	4	4	
	無形文化財		0	0	0	0	0	
民俗	有形の民俗文化財	2	0	0	0	6	8	
文化財	無形の民俗文化財	0	_	0	2	4	7	
	遺跡	1	0	0	2	8	11	
記念物	名勝地	1	0	0	0	0	I	
	動物、植物、地質鉱物	2	0	0	3	18	23	
	文化的景観			0	_	_	0	
伝統的建造物群				0	_	_	0	
	合計	9	90	1	9	72	181	

_

Ⅰ 表中の指定等のないものの表記は以下のとおりである。「0」・・・制度はあるが指定等のないもの 「―」・・・制度がないもの

² 重美は、重要美術品ノ保存二関スル法律(昭和 8 年法律第 43 号)で規定されていた「重要美術品」を指す。昭和 25 年の文化財保護法(昭和 25 年法律第 214 号)施行により法律は廃止となったが、認定物件については当分の間効力を有すると規定される。(文化財保護法附則第 4 条)

ア 有形文化財

①建造物

指定では中近世の寺社建造物が多く、登録では醤油 等の産業関係を中心とした近代以降の建造物が多い。

明王寺釈迦堂(国重文)は、室町期の建造物で、単層入母屋造の本瓦葺である。内部には禅宗様の須弥壇と極彩色の厨子がある。棟札や願文等が刻まれた文字瓦が合わせて指定されており、施主や寄進者、築年が明らかであるほか、池田村の者が細川管領方として戦乱に従事していた記事もあり、中世の小豆島の様子が垣間見える貴重な資料である。

江戸時代のものでは、内海八幡神社石鳥居(町有形) や坂手観音寺の鐘楼(町有形)のほか、文化年間に阿 波から移住して廻船問屋を営んでいた阿波屋岡田家 の邸宅(国登録有形)がある。

明治期の建造物として、苗羽小学校旧田浦分校校舎 (町有形)がある。これは、壺井栄の「二十四の瞳」の舞台となったもので、近隣の二十四の瞳映画村内に再現された木造校舎セットの元となったものである。映画村のセットと合わせて当時の情景を体感できる文化財として活用されている。本町唯一の近代校舎建築としても貴重である。また、産業に関するものとして、マルキン醤油記念館(国登録有形)や正金醤油醤油蔵(国登録有形)等の醤油醸造施設や、金両藤井家住宅(国登録有形)や塩田家住宅(国登録有形)等の醤油醸造で栄えた邸宅がある。醤油醸造施設の多くは、現在も醤油の醸造に活用されている。

②美術工芸品 (絵画)

寺社の持つ奉納物が主で、江戸時代の絵師三木文柳の光明寺格天井「百花図」(町有形)と、その弟子である三木算柳の亀山八幡宮奉納絵額(町有形)がある。三木文柳は、高松松平家に伝えられる水生生物等の博物図「衆鱗図」(県有形・高松市)の作者とされており、文柳の光明寺格天井「百花図」は、格天井の | 枚 | 枚 に植物がち密に描かれており、博物図として貴重である。この他に「紙本著色春日曼荼羅図」(町有形)等の信仰に関するものがある。



図 2-76 明王寺釈迦堂



図 2-77 苗羽小学校旧田浦分校校舎



図 2-78 マルキン醤油記念館



図 2-79 亀山八幡宮奉納絵額

③美術工芸品(彫刻)

平安時代から中世にかけての信仰に関するもので、 仏像、神像、動物彫刻がある。古いものとしては木造 大日如来坐像(平安時代(10世紀末頃)・正法寺・県 有形)や木造二天立像(平安時代(10世紀末から11 世紀初期)・正法寺・県有形)がある。これらは県内で の例でも古い時期のものである。

また長勝寺に伝承される木造伝池田八幡本地仏座像 (平安時代(12世紀)・国重文)は、それぞれ如来形・ 菩薩形・比丘形であるが、頭部を仏像様、体部を俗人様 につくられた神像で、他にあまり例がない。

そのほか、地蔵菩薩立像(平安時代(12世紀)・浄土寺・町有形)や、不動明王立像(鎌倉前期・常光寺・町有形)や古江庵の木造阿弥陀如来立像(鎌倉末期・古江庵・町指定)、木造狛犬(鎌倉末期から南北朝期・内海八幡神社・町有形)等がある。

④美術工芸品 (工芸品)

主に梵鐘と石造物があり、梵鐘は、河内鋳物師により鋳造された梵鐘(建治元年(1275)・長勝寺・国重文)や大坂で鋳造された梵鐘(観音寺・町有形)等がある。

石造物では、火山石(さぬき市)造の白粉石の多重塔(鎌倉期・町有形)、宝篋印塔(建武5年(1338)・長勝寺・国重美)、石灯篭(寛文10年(1670)・内海八幡神社・町有形)等がある。

⑤美術工芸品(書跡・典籍)

中世から近世にかけての仏教や黎明期の小豆島霊場のあり方等を知ることができる観音寺(坂手地区)に伝承される観音寺聖教類(応永 29 年(1422)~承応元年(1652)・町有形)がある。

⑥美術工芸品(古文書)

島の中近世の歴史を考える上で、重要なものが多い。古いものとしては中世以降の草加部村の様子を伝える赤松家文書(安田村年寄家・町有形)があり、近



図 2-80 木造伝池田八幡本地仏坐像



図 2-81 梵鐘(長勝寺)



図 2-82 観音寺聖教類



図 2-83 池田村検地帳(平井家岡田家文書)

世以降のものとしては、検地帳や豊富な行政史料を持つ平井家 岡田家文書(池田村庄屋家・町有形)や福田・吉田村検地帳(福 田村・町有形)、漁ろうや海難等の史料が多い壺井家文書(坂 手村年寄家・町有形)があり、庄屋等の文書が多い。壺井家文 書には、寛政 4 年(1637) の島原の乱の際に原城の一揆方か ら放たれた矢文があり、特筆すべき貴重な史料である。

高橋文右衛門の醤油醸造を伝える橋本屋「萬覚」「醤油帳」 (町有形) は、小豆島の醤油産業の実態を示す最古の史料で、 文化元年(1804)頃の島醤油の大坂への出荷を示す島の醤油 産業の歴史を語る上で欠かせない。

⑦美術工芸品(考古資料)

苗羽地区の亀尾山古墳で出土した四獣鏡(町有形)がある。

⑧美術工芸品(歴史資料)

歴史資料としては、棟札と石碑がある。

棟札は、池田亀山八幡宮と内海八幡神社、福田玉比売神社の もの(町有形)で、中世から近世にかけ信仰に関わる建物の履

歴等を知る上で重要である。 恩澤の碑 図 2-84 石碑は、恩澤の碑(蒲生・町有形)があり、文久年間に池田 湾に停泊したイギリス艦隊を見物していた村民が暴発した弾丸にあたって即死したという事件にあたり、 津山藩の鞍懸虎次郎が奔走して英国から賠償金を得たという史実を記念したものである。



①有形民俗文化財

民俗芸能、娯楽に用いられるも のとして、池田の桟敷(国重有民) や中山の舞台(国重有民)のほか、 農村歌舞伎関係の根本類、衣裳、道 具等(町有民)がある。これらは島 の農村歌舞伎や秋祭りを伝えるも ので、大切に守り継がれてきたも のである。

そのほか、江戸時代に築かれた しし垣(長崎地区・橘地区、町有民) や船図・船大工道具(町有民)、生 活や生業に関するものとして清見 寺の下り井(町有民)、雨乞い祈願



図 2-85 池田の桟敷

のために建立されたお水大師供養塔(安田地区、町有 民)等があり、島の生活を知る上で重要なものが指定 されている。

②無形民俗文化財

島外との交流により生まれた民俗芸能で、小豆島農村歌舞伎(県無民)や安田おどり(県無民)があり、これらは島の歴史や文化を演目や唄の題材として伝える特徴がある。このほか、島の生活文化、祭り、行事を示すものとして、盆行事である川めし(町無民)や秋祭りの付属芸能であるオシコミ(町無民)やオオネリ(町無民)、幟さし(町無民)等がある。

また、食文化の民俗技術として、小豆島の伝統的な 醤油醸造を中心とした讃岐の醤油醸造技術(国登録無 民)がある。

ウ 記念物

①遺跡(史跡)

町内には II 件の指定史跡があり、代表的なものは、 徳川大坂城普請に関連する採石遺構である大坂城石垣 石丁場跡 小豆島石丁場跡(国史跡)がある。これは 筑前福岡藩の黒田家が採石を行った岩谷地区の丁場跡 で、このほか町内には石場地区(町史跡)、福田地区(町 史跡)の丁場のほか、関連遺跡として石の管理を行っ た番屋七兵衛屋敷跡(県史跡)もあり、土庄町を含め て島内に広く分布している。

縄文時代のほら貝岩洞穴遺跡(町史跡)、弥生時代の 高地性集落で銅鐸・銅剣が出土した極ヶ谷牛飼場遺跡 (町史跡)、古墳時代の弁天島古墳群(町史跡)、南北 朝期の備前国児島郡の武将佐々木信胤が築いたとされ る星ヶ城跡(県史跡)、内海八幡神社の祭典のお供え水 をとったとされ、周囲の地名にもなった井戸である観 音堂石井(町史跡)等の遺跡、正徳越訴事件で獄門・ 斬首となった池田村庄屋平井兵左衛門が斬首された平 井兵左衛門氏政終焉の地(町史跡)がある。

②名勝地

神懸山(寒霞渓)が町内唯一の指定名勝(国名勝)



図 2-86 オオネリ (池田・上地地区)



図 2-87 川めし



図 2-88 大坂城石垣石丁場跡 小豆島石丁場跡



図 2-89 神懸山 (寒霞渓)

である。風化した凝灰角礫岩で構成されるさまざまな 景観が堪能できる。

③動物・植物・地質鉱物(天然記念物)

植物が 22 件、動物が I 件で、地域の植生の特色や独自性を示すもの、著名な名木、地域のシンボルとなっているものがある。

植物は、誓願寺のソテツ(国天記)等の巨樹が 10件、皇子神社社叢(国天記)や福田八幡神社社叢(県天記、西村高木明神社叢(町天記)等の社叢が9件、寒霞渓のショウドシマレンギョウ群落(町天記)等の群落や樹林が3件で、島の植生を特徴づける多様な樹種や固有種が指定されている。

動物は、老杉洞のニホンザル群(県天記)があり、 ニホンザルの社会構造等の研究資料として重要である。

工 文化的景観3/伝統的建造物群4

現在「文化的景観」及び「伝統的建造物群保存地区」 として、選定された地区はない。

オ 文化財の保存技術。

現在「保存技術」の選定を受けたものはない。

カ 埋蔵文化財

埋蔵文化財包蔵地は、町内で 49 ヶ所である (令和4年8月現在)。旧石器時代と古代の遺跡は確認されていない。それ以外の時代の内訳は以下のとおりである。

縄文時代の遺跡は、殿山遺跡と高地性遺跡であるほら貝岩洞穴遺跡(町史跡)の2ヶ所である。弥生時代の遺跡は、18ヶ所で、内訳は集落跡が3ヶ所、包含地が14ヶ所である。古墳時代は10ヶ所で、内訳は



図 2-90 誓願寺のソテツ



図 2-91 皇子神社社叢



図 2-92 徳本遺跡(奥籠遺跡)

古墳が6ヶ所、洞穴が Iヶ所、包含地が3ヶ所、窯跡が Iヶ所である。中世は9ヶ所で、南北朝期の備前国児島郡の武将佐々木信胤が築いたとされる星ヶ城跡(県史跡)とそれに関連した中世城館跡や、播磨

^{3 「}文化的景観」 地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの(「文化財保護法」第2条第 | 項第5号)

^{4 「}伝統的建造物群」 周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値の高いもの(「文化財保護法」第 2条第 | 項第 6 号)

^{5 「}文化財の保存技術」 文化財の保存のために欠くことのできない伝統的な技術又は技能(「文化財保護法」第 147 条第 1 項)

灘の岩礁にある沈没船の海底遺跡がある。内訳は、城館が7ヶ所、集落跡が1ヶ所、その他が1か所である。近世は12ヶ所で、大坂城石垣石丁場跡 小豆島石丁場跡 (国史跡)に代表される徳川大坂城普請に関連する採石の生産遺構が主な遺跡である。

(2) 日本遺産

令和元年度(2019)に認定された「知ってる!?悠久の時が流れる石の島 ~海を越え、日本の礎を築いたせとうち備讃諸島~」の町内に所在する構成文化財は13件である。江戸時代の大坂城築造に関する史跡(国史跡「大坂城石垣石丁場跡 小豆島石丁場跡」ほか)やそれ以降の石丁場、石工の信仰、食文化に関するもの、石の利用に関するもの等がある。

これらの構成文化財には、未指定のものも多数含まれており、保護の仕組みが整っていない。今後必要に 応じて保護の措置を講ずる必要がある。



図 2-93 森ヶ滝丁場跡

【タイトル】知ってる!? 悠久の時が流れる石の島 〜海を越え、日本の礎を築いた せとうち備讃諸島〜 【認定市町】岡山県笠岡市、香川県丸亀市、香川県土庄町、香川県小豆島町 【ストーリー】

瀬戸内備讃諸島の花崗岩と石切り技術は長きにわたり日本の建築文化を支えてきた。日本の近代化を 象徴する日本銀行本店本館などの西洋建築、また古くは近世城郭の代表である大坂城の石垣など、日本 のランドマークとなる建造物が、ここから切り出された石で築かれている。島々には、400年に渡って 巨石を切り、加工し、海を通じて運び、石と共に生きてきた人たちの希有な産業文化が息づいている。世 紀を越えて石を切り出した丁場は独特の壮観な景観を形成し、船を操り巨石を運んだ民は、富と迷路の 様な集落を遺した。今なお、石にまつわる信仰や生活文化、芸能が継承されている。

【町内の日本遺産の構成文化財】

国史跡	大坂城石垣石丁場跡 小豆島石丁場跡		
県史跡	大坂城用残石 番屋七兵衛屋敷跡		
町史跡	大坂城築城残石(福田)		
未指定(遺跡)	森ヶ滝丁場跡		
未指定(無民)	山の神祭り		
町史跡	大坂城築城残石 (石場)		
国登録有形他	醤油蔵と石道具の街並み		
国名勝	神懸山(寒霞渓)		
国重有民	池田の桟敷		
未指定(有形)	小豆島の山岳霊場		
国重有民	小豆島農村歌舞伎及び舞台、石の桟敷席		
未指定(無民)	石節		
町有民他	しし垣		



図 2-94 醤油蔵と石道具の街並み(醤の郷)

(3)「地域の宝物」(未指定文化財)の概要と特徴

本計画の作成過程で行う文化財の総合把握作業については、刊行物等からの収集以外に、文化財保護に地域の意見を反映させることを目的として、住民へのワークショップやアンケートを行い、地域住民が将来に伝えていきたい町民の考える「地域の宝物」の収集に努めた。ワークショップ等の詳細については、第 | 章に記載している。その結果、有形無形を含めて延べ |,600 件の「地域の宝物」(未指定文化財)を把握している(令和 4 年 8 月現在)。これらは十分な価値づけができていないが、住民が素朴に考えている小豆島の強みである。今後町や地域の魅力を考えていく上で、欠かすことができないもので、将来指定・登録を受ける文化財となる可能性を持つ。

収集した「地域の宝物」は、以下のとおり分類を行った。大分類及び小分類については、文化財六類型に準じた形で設定し、この枠で捉えきれないものについては、「その他」に分類した。主な「地域の宝物」については、巻末資料に添付している。これらには、現段階において価値づけが十分にできていないもの、刊行物や聞取りにより収集したが、現時点で存在していることが確認できていないものが含まれていることにご留意いただきたい。

大分類	小分類	説明	未指定の 「地域の宝物」	歴史系	自然系	食系	取組系
有形文化財	建造物	寺社、民家、工作物、石造物、土木工作物等の建物 や施設	471件				
	絵画	絵図、風景画、絵馬ほか	7件				
	彫刻	仏像、神像、太鼓台ほか	94件				
	工芸品	鉄製品、布製品、石像、石彫、現代アート作品ほか	85件				
	書跡・典籍	著名人の書画、典籍ほか	5件				
	古文書	古文書、古記録、行政関係資料ほか	26件				
	考古資料	土器、石器等の発掘された遺物	件				
	歴史資料	記念、顕彰、道案内等の石碑等の歴史を表す文字資 料ほか	152件				
右	生産、生業	農具、漁猟具、工匠用具、紡織用具、作業場、しし 垣ほか	13件				
有形民俗文化財	交通、運輸、通信	運搬具、舟車、飛脚用具、関所ほか	5件				
	信仰	祭礼具、法衣具、奉納物、偶像類、呪術用具、社祠 ほか	26件				
	民俗芸能、娯楽、遊戲	衣装、道具、楽器、面、人形、玩具、舞台ほか	6件				
	その他の民俗文化財	衣食住、生産、生業等のコレクション	2件				
文化財俗	風俗慣習	年中行事、祭礼、法会 (各季祭礼、盆行事等)	100件				
	民俗芸能	盆踊り、農村歌舞伎、獅子舞、民謡等	28件				
	民俗技術	生活や生産のための用具や用品を作る技術、食文化	42件				
遺跡	貝塚、集落跡、古墳等	遺跡、集落跡、古墳、包含地ほか	30件				
	政治に関する遺跡	歴史的事象発生地、城跡、屋敷跡、戦争遺跡ほか	10件				
	祭祀信仰に関する遺跡	修行、葬送、祭祀、御神体ほか	3件				
	教育・学術・文化に関する 遺跡	学校跡地、文化人の生誕地ほか	4件				
	経済・生産活動、交通、治水 等に関する遺跡	採石場、鉱山、道ほか	24件				
	墳墓・墓		4件				

大分類	小分類	説明	未指定の 「地域の宝物」	歴史系	自然系	食系	取組系
名勝地	公園・庭園	景勝地の公園、日本庭園	10件				
	岩石・洞穴	特徴的な岩石、洞窟	7件				
	峡谷・瀑布	渓谷、滝	3件				
	湖沼・湧泉(池泉)	池、沼、湧水	16件				
	海浜・島嶼	海岸(ビーチ)、湾、島(半島)	30件	***************************************			
	山岳・丘陵・高原・河川	特徴的な山や丘、高原、川(水系)	28件				
	展望地点	美しい景観の見渡せる地点(讃岐百景を含む)	39件		***************************************	***************************************	***************************************
記	動物	動物、棲息地、農畜産物	6件				
	植物	名木、巨樹、老樹、栽培植物、並木、社叢、群落等	45件				
120	地質鉱物	岩石、鉱物、化石、地層、洞穴、湧水、標本	15件				
	伝統的建造物群	周囲の環境と一体をなして景観を形成している伝統 的な建造物群	4件				
	文化的景観	人々の生活や生業、風土によって形成された景観地	5件				
そ の 他	民話・伝承地	地域に伝わるお話、またはその場所	131件				
	地域活動	地域を支える活動	64件				
	名物	地域の名物、名店	59件				

1,600件

図 2-95 「地域の宝物」分類図(令和 4 年 8 月現在)

「地域の宝物」分類図の凡例

- ① 本リストは、文化財保存活用地域計画作成の過程で行った文化財の総合把握作業により抽出した「地域の宝物」のうち、文化財保護法関係法令で保護の措置が取られていないものの分類と件数を示したものである。
- ② 対象としている「地域の宝物」については、各公民館や関係団体のワークショップ及び町内の児童生徒に実施した「地域の宝物」ワークショップの成果と、文化財報告書や郷土史等の各種刊行物に記載される「地域の宝物」をまとめたものである。
- ③ 表の右段には、公民館等のワークショップで設定した「歴史系」「自然系」「食系」「取組系」の視点による分類との対応を示している。ワークショップでは、一つの宝物に対して複数の視点から分類することが可能なものが多くみられたため、六類型の分類に対応する形で表記した。
- ④ 不明確な「地域の宝物」(59p) で記載される「風土」は、明確な物事として規定されていないものであるため、分類図(図 2-95)ではカウントしていない。

ア 有形文化財

① 建造物(472件)

建造物では、近代和風調査(平成 20 年 (2008))を中心とした建造物を中心として、各地域で信仰される寺社や祠、石造物等を収集した。ほとんどが近代に属すが、一部民家と、寺社の庫裏、山門、拝殿、鐘楼、客殿等の建物や、鳥居、石塔等に近世のものが見られる。多くが町の特徴的な町並みを構成しており、貴重なものも含まれると考えられるが、未調査であるため、価値づけの調査を行う必要がある。

また、近代以降の交通の発展に欠かせないものとして、橋や隧道(トンネル)、港湾設備等の土木工作物や商業、製造等の施設を含んでいる。

現代では、観光施設、港湾施設、現代アート施設等の現役かつ生活に身近な施設が挙げられている。また子どもたちからは、普段日常的に利用している体育施設や公園、その地域に根差したダムや温泉、公民館等が挙げられている。

特徴的なものとしては、石産業や交通を象徴するものとして、内部のアーチ構造全てを花崗岩で構成した「高坂隧道」(中山地区・大正 5 年(1916))や、醤油の町並みを象徴する「醤油会館(旧醤油協同組合事務所)」(馬木地区・昭和 3 年(1928)建築)や、醤油産業の近代化を象徴するコンクリート槽をもつ「丸金醤油第 15 号諸味蔵」(苗羽地区・大正 12 年(1923)建築)等がある。また、大規模な土木工作物として明治期頃に形成された石積みの「岩谷漁港」がある。

②美術工芸品(368件)

絵画では、信仰に関する「熊野曼荼羅(おりょうの 絵)」(阿弥陀寺)等のほか、池田地区と縁深い絵師三 木文柳の作品が見受けられる。近代以降では、オリー ブと瀬戸内の風景等をモチーフとした絵画類のほか、 小豆島の観光開発の過程で作成された豊島出身の絵 師寺本左近「寒霞渓鳥観図」がある。

彫刻では、各霊場寺院や庵が所蔵している仏像が多い。神像はあまり例が無いが、芦浦住吉神社旧蔵の「芦浦住吉神立像」(現在は内海八幡神社が所蔵)は室町期



図 2-96 醤油会館(旧醤油組合事務所)



図 2-97 高坂隧道(内部)



図 2-98 芦浦住吉神立像

のものとされ、貴重である。近代以降では、各地区が奉納する太鼓台に刻まれた彫刻のほか、大西徹山の「犬の像」等の彫刻家が寄贈した作品のほか、昭和51年(1976)災害慰霊のために設置された像や、平成期には内海町が行った「石彫シンポジウム」に関連する石彫作品、瀬戸内国際芸術祭でのアート作品、町おこしで製作された石彫作品も見られる。

特に子どもたちを中心として挙げられているアート作品は、設置から数年を経て、観光資源としても活用されていることから、「地域の宝物」として認識され始めている。

工芸品では、各寺社の境内や路傍にある梵鐘や狛犬、灯篭等の奉納物や、民俗信仰に由来するような石造物が多い。中には、潜伏キリシタンに由来するとされるものもあり、今後価値づけを要するものがある。また、秋祭りで各地区が奉納する太鼓台に付属する金繍の施された水引幕等の付属品のほか、現代のもので旧池田町の町おこしとして設置された「石のカエル像」や、瀬戸内国際芸術祭に関連する現代アート作品がある。

書跡・典籍では、名勝神懸山を題材とした文人墨客による書跡があるほか、近代の文学者である壺井栄や 繁治、黒島伝治らの残した直筆原稿がある。



図 2-99 現代アート作品と子どもたち (瀬戸芸 2013 スター・アンガー(坂手地区))



図 2-100 岩谷荒神神社の狛犬



図 2-101 太鼓台の水引幕(北地地区)

古文書では、平成 25 年度(2013)から行った古文書等調査事業において把握したものがある。 考古資料では、小豆島民俗資料館に所蔵していた考古資料群がある。 歴史資料では、先人顕彰や災害、開発、俳句や詩等の文学、史実に関する石碑が多数所在している。特に名勝神懸山(寒霞渓)内や霊場等には、多数の記念碑や句碑等が伝えられ、景観の一部となっている。また、「六十六部廻国供養塔」等小豆島遍路の歴史を紐解く可能性をもつ石碑等が点在していることが確認されている。また、棟札等の文字資料についても、寺社を中心に確認されている。

イ 無形文化財(0件)

無形文化財として把握しているものはない。

ウ 民俗文化財(220件)

有形民俗文化財では、生産・生業、交通・運輸、信仰、民俗芸能、衣食住等に関するものがある。

生産・生業に関連するものでは、オリーブや醤油、 素麺等の伝統産業に関連するもののほか、漁業に関連 した魚見台や漁業関係道具が確認されている。

信仰に関するものでは、八幡神社の例大祭で奉納される太鼓台がある。これは、各地区で保有しているもので、布団屋根形式を基本としながら、地域ごとに形式や歴史に特徴があり、ち密な彫刻や金繍を凝らした水引幕があるほか、「櫓落とし」と呼ばれる高さを調整するギミックを持つものもある。太鼓台は彫刻・水引幕等の持つ美術工芸品としての価値とともに、地域を挙げて舁き上げる祭礼のあり方が多く示されており、まさに地域を象徴する「地域の宝物」である。そのほか、八幡神社の例大祭に関連した提灯行列にもちいる箱提灯などもある。

民俗芸能に関するものでは、太鼓台の奉納される場である馬場や、農村歌舞伎の道具類等、コレクションとして町有の旧民俗資料館蔵資料や個人の収集した民俗資料群がある。

無形のものでは、風俗慣習として、とんどや夏祭り、各地区盆行事などの行事が多数伝承されている。祭礼に関するものが多く、太鼓台奉納や固有の 民俗芸能が関係する秋祭り、各地域で行われる神社 の例祭(夏祭り)、盆踊り・川めし・精霊流し等の盆



図 2-102 壺井繁治文学碑



図 2-103 太鼓台の彫刻と水引幕(室生地区)



図 2-104 内海八幡神社例大祭の箱提灯(橘地区)



図 2-105 葺田八幡神社例大祭のしし舞奉納

行事、小正月のとんど、農村歌舞伎や虫送り等が多く 挙げられている。秋祭りに関連するものは、老若男女 や地域問わず広く取り上げられているほか、小豆島の 独特な盆行事も、あまねく取り上げられており、広く 「地域の宝物」として認識されている。

民俗芸能では、祭礼に関連した盆踊りや獅子舞、石切り唄等の民俗芸能や作業唄がある。安田おどり(県無民)に関連して、子どもたちが「地域の宝物」と考える理由として、「子どもが安田おどりを踊れるという伝統を受け継ごうという思い」を挙げており、大人たちが民俗芸能を継承しようとする取組や思いが子どもたちにも伝播している。このような子どもたちの「地域の宝物」の継承に関する思いは、アンケート中の随所に現れている。

また、民俗技術としては、醤油(木桶)、素麺、佃煮、オリーブ、農畜産物、漁業などの食品の生産加工等の技術のほか、伝統的な食文化として「かきまぜ」等の郷土料理や、「いぎす」等の瀬戸内海の海産物を用いた伝統食、「わりご弁当」や「押し寿司」等のハレの場で食べられるごちそう等が含まれる。子どもたちからは、醤油、素麺、佃煮等の著名な食品産業が多く挙げられている。多くの郷土料理が挙げられているが、ワークショップ時に現在はあまり作る機会がないという声も聞かれ、実際に郷土料理に触れられる機会は減っている



図 2-109 かきまぜ



図 2-106 ヤッシッシ (馬木金羅明神祭)



図 2-107 安田おどりの練習風景(安田公民館)



図 2-108 わりご弁当



図 2-110 いぎす

工 記念物 (274件)

史跡は、学校跡地や旧道、遍路道、壺井栄生誕地等 の著名人の関係地、自動車以前の時代に使われていた 旧道や、現在の遍路に利用される遍路道が挙げられる。

名勝は、小豆島の起伏に富んだ地形や海岸線等を活かした公園、峡谷、湧水、海浜、島嶼、山岳、景勝地点等の地形と瀬戸内海が織りなす景勝地や、寺社や個人宅の庭園等が挙げられる。

主には、作庭家の重森美玲氏による庭園(栄光寺庭園「龍門庵」)や、醤油醸造で財を成した富豪の邸宅の庭園(金両藤井家、ヤマサン塩田家、正金藤井家、キッコ石石井家等)がある。



図 2-111 栄光寺庭園

【主な名勝地】

公園	オリーブ公園(西村)、城山桜公園(池田)、いずみ公園(福田)、ふるさと村(二生)ほか
庭園	栄光寺の重森美玲庭園(安田)、保安寺の枯山水庭園(蒲生)、誓願寺の庭園(二生)、金両藤井家庭園(馬木)、
	ヤマサン塩田家庭園(馬木)、正金藤井家庭園(馬木)、キッコ石石井家庭園(馬木)ほか
洞穴	寒霞渓内洞穴(草壁)(石門、西の石門(窓))ほか
峡谷	寒霞渓(草壁)
池泉	目洗い池(蒲生)、縄手池(安田)、湯船の水(中山)ほか
海浜	オリーブビーチ(西村)、希望の道(橘)、瀬戸の浜(坂手)、遠手浜(福田)、白崎海岸(橘)、内海湾(内海)
	神浦(三都)、蒲野松原(三都)、吉田浜(福田)、清水海岸(西村)ほか
	※ 海に面するほとんどの地区から、「海」が挙げられている。
島嶼	花寿波島 (三都)、室生弁天島 (室生)、児島 (坂手)、小島 (福田) ほか
山岳	拇指嶽(橘)、清瀧山(安田)、碁石山(苗羽)、洞雲山(坂手)、湯船山(中山)、城山(池田)、水晶山(福
	田)大麻山(蒲生/池田)、瑜伽山(安田)、星ヶ城山(草壁/安田)、段山(池田)、飯神山(二生)ほか
高原	西寒霞渓(池田)
展望	城山(池田)、西の滝(池田)、池田の桟敷(池田)、ふれあい公園(池田)、赤坂(二生)、吉野崎・浜(三都)、
地点	蒲野(三都)、神浦湾(三都)、オリーブ公園・丘(西村)、寒霞渓(草壁)、粟地ダム(安田)、岡の坊(安田)、
	星ヶ城(草壁/安田)、瑜伽山(安田)、清瀧山(安田)碁石山(苗羽)、宮山(苗羽)、大角灯台(坂手)、
	洞雲山(坂手)、隼山(坂手)、南風台(橘)、拇指岳(橘)、いずみ公園(福田)、吉田(福田)、
	水晶山(福田)、福田海岸(福田)、飯神山(二生)ほか



図 2-112 オリーブヶ丘(西村)



図 2-113 室生弁天島 (室生)

天然記念物は、動物、植物、地質鉱物に分類される。動物では、ホタル(中山殿川、福田森庄川、安田大川ほか)やヤハタマイマイ(カンカケマイマイ)などの虫のほか、ハヤブサ(三都)やカモ(安田)等の野鳥、ネコ、ウサギ、イシガメ等の野生動物や、アサリ、ハマチ、マダイ、タコ等の豊富な魚介類が挙げられている。

植物では、ショウドシマレンギョウやミセバヤ等の 貴重な植物の群落、電照菊やミモザ、オリーブ、スモ モ等の栽培植物のほか、城山の桜公園(池田)、粟地ダ ムの桜(安田)、植松馬場の松(安田)、ジョウコウジ ザクラ(苗羽)、ミモザの小径(西村)等の並木、オリ ーブ原木(西村)や平木神社の杉の木(池田)、頌徳の 桜(池田)、安田小・幼稚園のソテツ(安田)、一本松 (西村)等の名木が挙げられている。また、香川県の 「保存木」(「香川県における樹木の保存に関する要 綱」)や「自然記念物」(「香川県自然環境保全条例」) で保護される樹木や森林などがある。

地質鉱物では、神浦権現山(皇子神社)のマントル直結安山岩(三都)、花寿波島の海食地形(三都)、富士風穴(三都)、瀬戸の浜の溶岩流(坂手)等のジオサイトのほか、標本として皇子神社の火山弾(三都)、大麻山の化石(池田)、シンプルトニック岩脈(苗羽)等が挙げられ、瀬戸内海地域の特徴を示すジオサイトとして貴重である。



図 2-117 皇子神社の火山弾



図 2-114 ヤハタマイマイ (カンカケマイマイ)



図 2-115 ミセバヤ



図 2-116 オリーブ原木



図 2-118 キツネノカミソリ

才 文化的景観/伝統的建造物群 (9件)

景観に関するものでは、醤油醸造に関連する建物群で構成される「醤の郷の景観」(安田地区、馬木地区、苗羽地区ほか)、漁村の狭い通路の町並みをもつ「坂手の町並み」のほか、「古郷の農村風景」(安田)、棚田景観と伝統文化が残る「中山千枚田」、オリーブ並木と内海湾の景観の美しい「オリーブ畑の景観」(西村)がある。これらは、島の豊かな自然を背景として、人々の生業の発展によって成立した景観である。



図 2-119 中山千枚田



図2-I2I 醤油醸造関係建造物群 (馬木・塩田本家)



図 2-123 醤油醸造関係建造物群 (芦浦・サカイ醤油)



図 2-120 内海湾とオリーブの景観(西村)



図2-I22 醤油醸造関係建造物群 (苗羽・マルキン醤油)



図 2-124 古郷の農村風景(安田)

カ その他の「地域の宝物」(255件)

その他として、「民話・伝承地」「地域活動」「名物」 の分類を設けた。

「民話・伝承地」は、地域に伝わる民話や伝説についてまとめたものである。文化財保護の対象とすることはできないが、地域が語り継いできた大切な「地域の宝物」である。ここでは、潜伏キリシタンや佐々木信胤、弘法大師空海に関する伝承のほか、池田の七不思議等が挙げられた。主には、『池田町の昔話』『小豆島の伝説と民話』に集録されている。

「地域活動」は、地域を支えている住民の活動についてまとめたものである。ここでは、自治会や公民館、行政、学校等の活動が挙げられている。主には、寒霞渓の保全活動を行なっている 1964 会や、福田地区の地域活性化を行っているあきゃきゃクラブ、安田古郷地区の農業振興を行っている東条農業集団、西村地区の郷土史の普及啓発を行っている西村誌を読む会、その他地域の美装や整備を行っている清掃活動や道普請、各地区の太鼓台運営組織等が挙げられている。

「名物」は、各地域自慢の名店や名品をまとめたものである。

【column】不明確な「地域の宝物」(「風土」)

本計画作成にあたって、特に子どもたちから多かったものとして、「風土」がある。これは、明確な「地域の宝物」を示していないが、肌で感じている地域の魅力についてまとめたものである。

多く挙げられているのが、「自然」「海」「山」「風景」の自然環境に関するものである。豊かな自然、キラキラした海、季節を感じることのできる山が、生活の身近に存在していることが理由として挙げられている。その他観光スポットがある点、祭礼行事が盛んに行われている点、その他学校や港、公園、店舗等が挙げられている。「人」も多く、周囲の人々が優しく挨拶してくれるような地域の人柄に関する点や、地域活動が盛んで郷土愛にあふれている点等が挙げられている。

これらは、明確な物事として規定されていないものであるため、分類図(図 2-95)にはカウントしていないが、将来に残していきたい「地域の宝物」である。



図 2-125 小学校跡地を活用した地域づくり (福田地区・あきゃきゃクラブ)



図 2-126 地域住民の児童生徒見守り活動



図 2-127 太鼓台運営の地域活動(安田地区・安田青年団)



図 2-128 地区の名誉と威信をかけて走る小豆島駅伝